

根岸へ廻り御隠殿へ着いたのが午後一時五分、向島を出たが午前九時五分丁度四時間、雨の日は平にお止申すが天氣の能い時出掛て御覽なさい一遊の價はキツトある處です、まして八重が咲盛ツたら奮發して川口迄出て赤羽へ渡ツて汽車で歸などは尤も妙だらうと思ふ、歸は上野のまた花見に上野は上野だけ又能い此様な立派な樹があるに難儀をして餘處に櫻を狩り暮すとは人間は餘計な物好をするものだぞ考へた、餘計と云へば人間の餘計な手間を省ため今に字は假名ばかり文は言文一致議論はヂヤン拳では是非をつけるやうになるとの事だから僕も今から下齧古のつもりで言文一致と洒落て見たが成程世話がなくツて手取

早くツて能い、只自分で何となく力が抜けて便ないやうな氣持がするのは馴れない故か平手な故か、下手な故に極ツて居るよとは情けない評判だぞ

兩夜 の 月

(一)

木犀の馨百舌の聲、初葺と蟹に膳の上でお目に掛ることになれば氣も丈夫なり躰も確、コレラの關も赤痢の固も先づ首尾よくこしたやうな心持、此で一つ秋の野山を巡り、暑に弛んだ性根を堅めんものと九月十六日の朝駿河の久能山にと志して旅立つ

寫眞師鶴淵氏手提器械を携へて相伴ふ、此行例のサア行かうの急催し、其の方角もさま／＼なりしを毎日富士の見える所が氣も爽きてよかるべしといふにて久能山とは定めしなり、此處は此夏社友一遊して其勝概を報じたれば今さら予のいふべきならぬと歸路三保の松原より牛臥を廻りたればそれに付て聊か記すなり、午前八時三十分の國府津行汽車にて十一時十分國府津に着き蔦屋にて晝食す、此日は天氣ことに朗かにて海の面は熨斗をかけたやうなり、幸堂氏の道中記にならひて此に晝食の献立を云へば椀はキスに生椎茸茗荷のはしらかし、刺身はカンパチ、鹽焼がエボ鯛いづれも味よく清くして二合燗詰とも合せて二人

で六十八錢ヤ安いぞ／＼以來此まで喰に來ることだ魚が鮮しくて格別と鶴淵氏のお褒、予は四年前の秋の洪水にしばらく此家の別荘をかりて難を避けし事あれば他ならぬ心地して嬉し、十二時五十二分此を發する汽車にて西に向ひしが車窓の物として眺めんとたのみし富士は雲かゝりて見えず心あてに只それかど蓋のやうに沸き立雲を中空に見て走る、箱根山にかゝりて水と岩との景色はよけれど長い隧道の六つ七つはうるさく景色と差引して是は少し損の方なるべし、四時半過江尻へ下て是より久能山へ幾里なりやと停車場出口の巡查に聞けど知らずと云ふ札受取りの人に亦聞けば是も確ならぬと一里半ぐらゐならんどの

事に例の地理通少したちるぎたり、實は出がけに富士見十三州の圖で見當をつけ、此から爰だから江尻を下りたらツイ其處だらうのダロウの上は如何したものが付き立ながらの相談に鶴淵氏は静岡より久能へ廻りし事あれど此處よりははじめてなり何にしる暮近くなりて歩行もなるまじ人車の事ならんと車夫に掛合へば久能へは三里あり上下なれば五十錢でよけれど今からでは歸もなし四十錢より負からず如何して〜三十五錢で行く者は有ませんも乗んなさるなら早くも乗んなさい外にお客が出来るとお氣の毒だ四十錢でも私共二人より外行く者は有りませんと中々手強し、其處へ宿引めく男立入り、是からお越より今日

はお泊りで明日になさいまし御案内も委しく致しますと如何やら岩城の湯本並にムク鳥といふ扱ひらしきに怖をなし、つひに車夫が云まゝに車に乗せられ、江尻の市中ならぬ川沿の近路といふを行く、富士見橋港橋など架りしは江尻川ならんよき川なり、此宿は家並よき宿なり、是より狭き田舎道また原續き濱邊と道あしからぬところを走りて六時前に久能山の麓に着く、道程成程二里餘はあるべし、朝七時二十五分新橋發にて出なば江尻へは一時四十何分に着す、夫より久能に車にて往復せんこと參詣時間を一時半と見つもりても暮合までには十分なり、此に歸るか或は清水港または興津等に一泊し翌日清見寺見物などゆ

るくして二日旅行には恰好の所なるべし

(二)

久能山は家康公の御遺骸のといまるところ、仰げば砦のごとき
石垣石阪千鳥がけ九折に疊み上げ見る目もいと険しきに三方
は削りなしたるごとき絶壁なり、登り拜せんは翌朝勇氣を新に
してのごとき、山麓の石橋といふ旅宿に泊る。昔は諸人の山に
登ることを禁じた。正月四月七月九月の十七日にのみ許され、
御宮奉行殿めしく固めたれば庶人ははるかに御山の麓石段の下
に稽首禮拜せしも今は何時にても誰人にも参詣勝手なり、左
れど春の道者連のほかつねは登山者多からずとて宿屋もいと

淋しきに別當の堂坊より番衆の詰所屋敷跡も荒れ蟲の音高き秋
の暮に近き渚の波の音打よせて物悲しき氣色なり、何しろ酒だ
肴も新しいのを頼むよと汽車と人車の勞を休むうち清潔した
浴衣を出しお湯が宜しといふに風呂場へ行けば狭けれど水も悪
からず是にて汽車の煤を落し座敷にもどれば白萩咲こぼれたる
庭に藤棚をもりて月の光を散らしたる大に趣きあり、障子取は
づさせ打寛ぎて飲む、椀はキスに三保海苔鱈の鹽焼また鱈の羹
付香の物白瓜にてなかく味よし酒二三壘飯もすまし、イザ是
より濱邊へ出て此のよき月を飽くまで眺めんと立上れば、私御
案内致しませうといと慧しき此處の息子の十三四なるが先に立

ち藁草履かして濱へ導びく、濱には所々に鹽田あり、濱付の畑は人の丈より高き甘蔗生たり、月は伊豆の岬の見ゆるまで雲なく晴れ渡れり、願みれば久能の頂にわづかに淡き雲一塊あるのみ、有渡の濱邊の月を見んとは一昨日の午後五時ごろまでは夢にも思はざりしに噫人は變つた所作をするものかなと見やる海邊に三四人坐して物云ふあり、聲は高けれど波の音の夫より高ければ何事か分ならず、息子に問へば彼は今海を見て漁を始めるどころなり既に五六日あと此濱へ鮪夥多しく集まり根子屋増村蛇窪の三ヶ村にて只一時ばかりの間に一尾十二三圓する鮪を四五百本も獲りました斯様な事は滅多に無い儲だそうにごさ

りますと語る、借は來たりし道々人寄集ひて酒飲み交す家をあらまた見たるが祭禮にはあらで大漁祝でありしか今宵も左る事あらば勇ましからんといふうち沙上偶語の人々は賞の少なきをいふならで獲の多きを認めけん皆起て合圖の叫聲をあぐれば濱なる漁船忽ち波に乗りて海に浮かびたり、地曳網面白しこれを下物にと云へば息子心得て我家へ走り歸り二合摺二本持ち來たり、一本を大漁の祝にとて年老いし漁師におくり兩人砂に坐して見るほどに波は荒くして網曳く力の足らざるやうなれば我は跳り出て加勢すれば息子は丸裸になりて綱に取付く、曳々曳々性急の大骨折に予は勞れて網の濱へ上るころは砂の上に倒れた

まゝになり、網は我が勞れし所よりは一二丁も東へ流れて上り
 鱒多く獲れたりとて人多く寄來りて罾々たり、砂に寝ながら月
 を見れば西の方より雲湧き出で久能の頂の一塊は猿の形に見
 えて山を蔽はんとす、久能の後に立つ雲は虎のごとくして黒か
 りしが猿の方は薄く淡くなりてやがて消えたり、何となく物を
 心に思はれて石を筆にかへて砂へ南無阿彌陀佛と書きたるが此
 時月は志ばし淡雲に包まれ沖のみ白くきらめきぬ

(三)

網曳に加勢したる寝美にとて潑刺たる鱒三尾貫ひ一廉の手柄し
 たる心地にて宿へ歸りしは午後十一時に近し、汽車の旅も一夜

泊れば旅心地馴れぬ床によく寐付ば能いがと鶴淵氏は用心して
 例の魔睡劑を一壘枕元におく、更け行くまゝに波の音かすかに
 耳に入り心澄みて果して睡られず蚊の聲も又甚だし、是のみは
 我が向島の心すれどそれは進撃に備ふる蚊帳といふ城郭あるに
 これは野戦に天幕なく敵の突貫あたりがたく手拭杯顔にあて、
 も防ぐに甲斐なし、起して蚊帳を釣らせんかとの相談もありし
 が人皆熟睡したるに呼さまさんも心なし、よし是も向島の名物
 が我があとを慕ふて此までつき來たりしと思へば憎からず古い
 洒落だが寢いのものやなくと噛れしあとを擦りて一夜を明か
 さんと空軒して寝たるを装へば、鶴淵氏は蚊に馴れぬ身の堪が

たくやムシと身を起して、能い智慧が有る是で少しは違ふだらうと彼の用意の酒を茶碗に注ぎ床の前へ置きしは此へ一に集らせんと彼の廿四孝の吳猛の智慧を襲ひしなり、茶碗の水を盃へ伏せて臭氣を止める呪ひよりこれは効あらずして此香に外より尙ほ蚊の集まるやうなるは詮方なし夜の明くる遅しと自ら雨戸繰り明け顔洗ふと其まゝ兩人して昨夜の濱邊へ出て朝日の麗々とのぼるを見る此時の志ばしの心持今の人か古への人か我ながら知らず、地曳網二三ヶ所引き居れどまた加勢する力もなし、左るにても昨夜砂を披きて濱へとゝめたる六字の大名號のあといかにと見めぐらすに寄せたる潮に洗れてやそれかとおもふと

ころもなし、此邊時々高潮ありて鹽田を荒し濱畑を破るとしはくあり先頃もよき鹽場と見立て西洋法の天日乾燥の鹽製造場を建し者ありしが勞力も資本も皆高潮に洗ひ去られて其後儲くる人もなしといふ、又當地に多き甘蔗も舶來砂糖廉き爲め作りて割に合ず肥料少なき土地に餅など用ひねばならぬゆゑ製するものなく年々收穫減少するばかり潮風強ければ茶にも桑にもよからずたゞ薩摩芋のみ作るといふ偕も此蔓の何國の瘦地にも蔓こる事よ、やがて宿に戻れば朝飽の設整ひありて褒美の鱈の鹽焼は格別に甘し、手加減の獨舌打といふ俗諺の如く我が骨力に得しと思へば味よきなり、左らば是より御山に登らんと息子を

案内に貸草履にて踏み出す、此山海面を抜く六百尺餘高さといふにはあらぬと指を立てたるやうに切立たる孤峯南面に十六曲千餘段の石垣雁木阪の登口あるのみ、見上げては急に峻しきやうなれど曲りくつて阪を付けたれば登るはいと容易し、一段巡り登りては海を稱し二段三段登りてはまた趣きのかはる景を眺め巡りくつて登りたるどころに櫓門あり番衆詰所ありて昔の見附の如し是よりまた登りて御宮奥の院あり（此山の事は先月はじめの我紙上に阪東太郎の名を以て社友長澤氏委しく叙せられたれば此には略す併せ看かへし玉は幸なり）諸構造華美ならずして莊嚴なり内陣を拜するにますく莊重にしていますく質素

なり家康公の治國策「萬事手丈夫」といふことは此の建築によりてもよく知られたり、此山に登らん人は必らず社務所につきて内陣拜觀を願はるべし、山内物見の松勘介井戸見る所また少からず

(四)

曆はちがへど今日九月十七日久能の御山に參詣するも縁ありと下り終りてまた一揖し、是より車を三保の松原へといそがす、江尻清水三保とも大抵同じ里程なりとか、來るときは心付かざりしが此邊の家は小さけれど瓦屋根多くまた屋根の上に網をかぶせたり、是は斯くして網を乾すのかと思ひしが濱邊松原いと

廣きに屋根にわざ／＼擴げるは子細あらんと車夫に問へば此邊
 風あたり強く屋根を吹きめくるのみかやしもすれば家も吹倒さ
 るゝ事あり網は屋根瓦の飛ばぬ爲なりといふ是にて浪高き日を
 想ひやるべし、農家の庭内かとおもふ狭き路を曲り曲りて折戸
 村といふに出れば漁師の小家多く貝小鱒など乾す臭堪へがたし
 されど路は砂道にて悪からず處々桃畑あり春は観花にとて人多
 く出づといふ折戸村を過れば一面薩摩芋畑はるかに濱邊に松林
 を見る三保神社は思しに似ぬ小社なりこれ焼失後の假殿ゆゑな
 るべし表に縣社御穂神社とあり境内人なく宮守る家も空家のご
 とし是れより濱邊の方松並木二丁ほど行きて砂山めくを登れば

東南みな海にして伊豆の方より遠州御前崎まで見渡さる羽衣の
 松といふは名に似ず木振もをかしからず木も大からず近年植繼
 しものなるべし傍らに羽車磯田神社の趾と標木ある一圍あり小
 さき碑もあれど剝蝕して一字を止めず、此が三保の松原かと只
 茫然たるばかりなりし、車を引きかへして渡し舟ある所に到り
 其處より江尻まで立舟五十錢にて小舟に乗る（これは久能の麓
 より乗りし車夫に賣られたるなり三保をよく御案内致しますと
 云直の四十錢の外に五錢づゝ増して置いて三穂の出崎へは廻ら
 ず神社と羽衣の松だけにして後へかへし志かも舟夫ともうなづ
 き合ひて興津に渡らんと云へば一圓出せなど法外の事を云しな

り三保も神社より先即ち三穂村を過ぎいつも繪で見ると三保が崎
 松が崎のあたりを逍遙すればさすがに景色よく面白きなりと後
 に人へ云れたりかゝる名所も不親切なる車夫の爲め我ムク鳥は
 目なし鳥となりて飛かへりぬ名所古跡を探らんと思ふものはよ
 く調べて行きて車夫の曳くがまゝにはなるまじきなり、憐むべし
 是から三保の松原の景色を畫くには上にムク鳥五六羽を飛ばせ
 ねば夫とは人の見知らぬことになるべし、トは先づ申戯、眞面
 目に云へば此の御穂の神社は大に研究すべき垂跡の地とおもふ
 寛文年中火災ありて古記神寶とも残らず焼亡せて徴とすべきも
 のもなく、只祭る神は三穂津姫三穂津彦の兩神なりといふ、こ

れを羽衣の天人と漁夫の伯梁を祭るといふは例の附會の話なり
 出雲國島根郡美保ヶ關に三保神社あり祭神は三穂津姫といふこ
 れと神縁在する神なるべし三穂津姫は高彦靈尊の皇女にて大
 己貴尊に配ひ玉ひぬ三穂津彦は其御子にてもしくは此浦に舟
 よせ玉ひて國を開き玉ひしあとにはあらずや、いかにせん度々
 の津浪に千代の松さへ浪に流れ傳へて残るは羽衣の事のみ東遊
 びの御穂の神樂も浪より外に音なしとぞ、小舟に帆を揚げて淺
 く清き清水灣に出て楮願みれば三保の景色繪のごとくにてまた
 よし、俗諺に遠きが花の香とてあまり近しみ狂るゝは飽かるゝ
 基なりといふ事を諷すが此の三保もまた遠く興津あたり或は龍

華寺などより眺むるがよきなり、三保にて富士の頭ばかりを雲の上に見たり富士あらば三保もまた景色を上げしならんに

(五)

三保より江尻への渡り舟夫は二里といへど見たるところは手招きせばうなづくべきほどにて一里ぐらゐるならん腰きり海に浸りて釣する人小舟にて釣る人多し波は平にて景色はよし右手に富士の頭のみを雲の上に見れば左手には頭に雲のかゝりし龍瓜山高し、此山は富士をのぞきて静岡邊にては第一の高山なりといふ、三保に乗せたる予が車夫はよき人にて種々の話のうち此龍瓜山の上に龍相権現あり舊の三月十七日鐵砲祭といふがあつて

皆鐵砲を持って山へ上り滅多打に放せど一人も彈丸に中る者なしこれ権現の利益にて此御守を持っては鐵砲に中る氣遣なしと語る左らば廿七年の戦争の折などは繁昌せしならんと戯れ、夫はエライ事でごさいました子を出した者や舍弟を出したものの女房かみさん(車夫公の口氣をうつす)皆な參詣に登りました、親族の身になつては左様も有らうか併し軍に出ながら彈丸に中らないやうにと願ふのは少し卑怯のやうではないか、ナニお前さん戦争に出たからつて鐵砲彈丸に中るばかりが役目ぢやアありません鐵砲彈丸に中らないで功名をしないばいけません御一新時分が左様だつて勇氣があつて眞面目に一生懸命に戦争して彈

丸に中つたものは死ぬ者貧乏でブルク構へて中らないで居た者は中つて死んだ者の分まで自分の功名にしてエラクなつたつて夫だから戦争の時には龍相様はやりました、成程夫だが龍相様がさうあらたかに御利益があるとすると此方で放す鐵砲彈丸も向ふに中らない勘定だが夫は如何すると云へば流石の車夫公一寸答へに支へたか詞はなくて先の車に後れじと驅出したるも可笑かりしが船夫に今聞けば龍爪山は龍が玉を掴みし形なり三保は出崎三つありて宛然龍の頭のごとく中三保に大沼ありて丁度眼のやうなりしも其は寅年の水に沼はなくなりたり龍爪山より見れば三保は胴のごとく崎が頭のごとく海に堰ひ出たる状なり

といふ、清水港の裏手近く漕げば芝濱あたりの料理屋のごとき建物あり、江尻にも海水浴場あり此海ならば危なげなくてよかるべし、江尻に船着きて二三丁行けば停車場なり、十二時二十四分といふに乗て東へ歸り、午後二時半過沼津へ着く此より下りて牛臥の三島館へ行んとす、人力車と舟と汽車とたてつけ休なしにて草臥たれば沼津の停車場を出て直ぐに右側のすしやへ上りまだ建つつけかけた荒壁を見ながら足を伸して一休みせしが此家のすしの安きこと驚くべし沼津は汽車の辨當もよき所なるがすべて此地は物價安しと見えたり、此より三島館まで一臺十八錢と人力車代の確に極めあるもまた誠に氣安し、三時

ころ車にて出づ市中四五丁して左に切れ狩野川の橋を渡る、此
 川は伊豆より出て此の沼津を流れ海に入るに川底深くして蒸氣
 船も泊るといふ少しの町をはなれて田圃に出るに稻の實りよき
 やうなれば車夫に問へば、ハイ今年は畑の物は十分でありまし
 たし稻は此通りの出来誠に能い年でございませうといふ、何處も
 出来は能いといふが東京は米の價が上つて居るよ、ハイ夫は相
 場師なんぞが勝手に上るのでございませう此方は一斗の背中で
 二錢下りましたまだく下りませう是は餅でございませうが此通
 りよく出来て居りますと是も心よき豊年車夫なりき

(六)

牛臥は沼津より一里ほど、池のごとくの入海底さへ清く見えて
 漣靜なり、三島館は三島驛の世古六太夫が設けたる海水浴場
 にて樓上より見めぐらせば鏡のごとき此海の向ふには寐釋迦山
 横はり其上に伊豆の天城山淡く霞めり、景色よきのみか料理も
 酒もよく頻りに氣に入りたる折しも月は左りに高き鷲頭の山よ
 り出て此の鏡の海に光満ちたれば子は手を拍ち聲を揚げて絶景
 を賞しぬ、昨夜は有波の濱の月今宵は牛臥の此月、明夜は舊曆
 八月十五夜なれど其の陰晴ははかりがたし兩夜の月の光あくま
 で身に浴びんと海邊に出て遊びまた樓にかへりて飲み褒め草臥
 に倒れたり、翌朝の朝日の景色また勇まし、海に入らんかな

ど云しも秋の朝風冷つきて水を見れば身の慄はるゝに腹の中に海水温湯をつくるこそよけれと金を散らす波を眺めながら散財の工夫をなし鷄淵氏は舟を命じて此の灣内を漕がせんといふ、氏はかねて此に遊び牛臥の景は舟で見ると大通なればなり、舟の支度出来酒肴も取入れやがて漕出づれば今まで見る事なきを惜みし富士の山は鷲頭と牛臥の間に屹としてあらはれたりしかも昨日や降りし雪一刷毛のいろどりまた類なし、牛臥より漕ぎ出て見れば久方のと黒人がりたき景色なり、松島より天の橋立よりよからう赤壁と桃源を一にしたやうなものだと又褒めることかぎりなし何とかいふ小島など廻り漕ぎかへしてもど

の樓にかへり晝食して此を出で沼津へ着きて氣に入りし昨日のすしやへ休み午後一時五十分沼津發の汽車にて六時過新橋へ着したり、此の牛臥の海水浴よき景のところのみか近傍には東宮御別邸あり縉紳の別荘も多く春は桃郷の桃花秋は松山松林に茸狩もすべく雪の景色もまた一入なりといふ只前面の寐釋迦山其名のごとく誠に巨人の仰向に寐たるごとき山の形、眼鼻口より腹腰足までそれと見ゆるが目馴れて忌々しく彼の蒲團着て寐たる姿や東山といふ優しみのなきが惜しきなり、沼津にはまだ千本松原などよき所多しと聞く、平作殿の跡式でも引受けて予も此に住まんかな月二夜心に雲もなかりけり、と古い事を新し

がりて記す

新西遊記

(一)

身を塵埃の外に脱れて心を山水の間に娛ましむる杯といふ捻ツ
 九事でもなくまた名所古跡をたづねて風月の談を資け觴咏の具
 に供ふるといふやうなノたる了簡にもあらず只旅好の旅鳥浮か
 れ鳥のかはくくと月にも立てば暗の夜にも手さぐりで見ると
 堂去年の松島見物より思ひ立たる嚴島詣、三景巡りの第二回目
 烏萬燈振立る鹿島立は五月十三日、其の朝雨に濡れ色の極黒ツ

ぼい紀行をものせんとする者は色の黒きを以ては憎まれぬ例の
 柳子と拙者なり、しかして其の次手をもて西は九州薩摩瀧四國
 も廻ッて猿とならんと心猿意馬に鞭うちて晴天大聖齒をむいて
 はやりても先に退治る妖怪もなければ向をさへぎる魔王もなし
 毛を吹いて癢を索むる擬西遊記はお止として今度は自脈の節酒
 養生お醫者入らずとほこりてもベストの檢疫に辟易しては南溪
 のあとも追ふべからず左れば彼の西遊でも此の西遊でもなく新
 聞紙上の西遊紀行トコロで新西遊記と題するのみ、偕出立前の
 作戦計畫といふものは初日大垣より攻め入りて養老の瀧に到り
 京都の若葉宇治の茶摘奈良の藤長谷の牡丹和歌の浦には名所が

ござれば是も詠めて住吉へ出で有馬の湯から須磨明石鐵拐が峯
 鷗越皆すさまじき働きを見せ播州巡りの松盡しより嚴島に渡
 り伊豫に渡りかぞふる湯桁の日敷を重ね讃岐の金比羅に詣で神
 戸に飛び大阪に立寄りて二人の旅姿も目に立ぬやうあらためて
 汽車で目出たく歸るつもり、それで幾日で入費は何程と其處等
 の事も大ざもり、只新橋から汽車に乗てさへ仕舞へば智恵は幾
 許も湧き出すからと先づ我々の本山とも云ふべき養老の瀧へ行
 く事だけを確に極め、十三日の朝まだ暗きより起出て支度のう
 ちにバラくバラ、ハテナ若葉の車笹の葉の露でもなからう雨
 とは些と注文違ひだが雨降の翁が又彼の雨合羽を取り出して門

出を祝して居るのであらう、よし／＼此は一着まけたと見せ安
 心させて出立させ後に雨を封じて仕舞はふ兵書に所謂守固きは
 誘ふてこれを攻むとあるは此だナ左もなく今朝が天氣なら雨降
 の翁が出漕りて汽車の時刻に間に合ふまい怠けた牛には豆で雨
 の音を聞かせ悦ばせて引張り出すとのこと雨の音で寅彦氏が勇
 んで出るも其理屈か幸先よしと天に目くばせして雨を褒め、イ
 ヤ／＼此雨は他目には降るやうに見えるが我が濡るゝ雨にては
 なしと母衣をかけんと云ふ車夫を制して新橋停車場へ駆け付け
 しは朝の七時、まだ發車には二十五分あれど氣早と云ひ家も我
 より近きに柳子の姿見え、待合室に入りつまた出つして待て

ども待てどもいまだ来らず人は切符をもども荷物をもども早や
 改札口へ詰めかけるに影も見えず、雨だからおやめに致しまし
 たと洒落て廢にしたのでもあるまいが若しは雨祝ひにしたか
 朝から浴びて居るのではあるまいか今度は禁酒旅行と觸出して
 あるに何故遅いか發車時刻の前に献つおさへつ御酒盛とは雨だ
 く雨酒呑めと聊かぢれ氣味のところへ五分前といふに如何で
 す天氣はといと得意氣にて驅付けられたり

(二)

柳 鳩亭 寅彦

待るゝ身にはなるとも待つ身にはなるなど言へり待宵の更行く
 鐘に晨の鶏をものかはと撥斥しつけし例しを思へば發車時刻に

迫るまで予を待つ竹翁の心中ヤキモキせらるゝは無理ならず、
 驛夫等が忙がしく振行く鈴の聲聞けば更て待つ夜の鐘はものか
 はと待宵の小侍従に心を掛け待合の大苦情といふものが出来上
 りしこそ氣の毒なれ、予は此日の朝雨の音に勇み立ち取揃へた
 旅装の中にも一番大切な例の合羽だが河童と合羽國音相通ず
 るだけに孰れも水を得て力づくものだ心懸ある雨男は點滴の音
 に眼を覺し寐忘れないから剛氣であらうとカツバと起て身支度
 整へ竹翁の察しの如く鳥渡雨祝ひとして酒杯は取上げしが嘗め
 た丈にて深くは參らず、殊に又朝寐坊がたまゝの早起なれば
 時ならぬ朝飯に腹の虫を脅かし胃袋に損所が出来なば行く先々

の難儀と思ひて生玉子のみを啜りたり、後に思へば皿に生玉子を落すよりも皿に水を盛つた方が合羽に對して効能多しと遅蒔に考へ附きしが其砌生憎にも小出しの智恵を切らして居たゆゑ其運にも立至らず、車を急がして新橋停車場へ行けば竹翁大待兼の心配最中後から來る者河童の何やらにて此處でも同じく河童の縁を遁ざりしぞ不測なる、オイ何うしたといふのだモウ皆な乗つて仕舞つた早くくと急れても予は沈着いて天氣の挨拶に及び吉例通り結構な日和になりました而も豫報に全國を警戒してあるは素敵ではありませんカナニサ首途の空合迄トノノノ拍子に行て居るから乗後れる氣遣なし随分緩りとお出なさいと

青切符を買ふて汽車に乗込み得意氣に髭を撫れば鑷子合に動き出てプラットホームに立續くペンキ塗の多くの柱は後へくと走り初たり先乗合の人々を見るに軍服嚴しき陸軍將校胡麻鹽頭の軍醫と共に我々の正面に陣取り横手には色蒼ざめし病人と附添らしき若者が沈み勝に腰を下し其他二三の乗客の外には萬緑叢中の紅なる者が二點ほどあり、一點は優れ一點は劣る皆王上の點と同行せざれば口も叩かず姿も亂さず劣れる方は堅氣らしく横濱あたりへ用達しと見ゆれど優れたる方は長旅なるべし、殊に婀娜めきたるは只の鼠にあらざンソヨ夫れの夫れといふ字即ち出頭の天がありとするも高砂謠ひし交情にはあるまじ、

斯んな贅事など考ふる間に汽車は各驛を過ぎて山北に着く此處にて名物の鮎の鮎を買んとせしが時早ければにや賣りに來ず左らばとて惠比須麥酒一壺をもとむれば竹翁商標の三郎殿よりも大いに莞爾つき此繪の釣竿で思出したが近來僕は釣道樂を始めて居るから此旅行にも道具を持つて來れば好かつた嚴島の濱邊や瀬戸内の航海中には大分獲物があつたものをもと垂綸の得意話し、如何さま瀬戸内の海では鮎が釣れませう汽船の甲板からも竿を出す程の勢ひなら汽車の窓でもお釣りなさい山の芋も頭だけ既に鰻に化した奴は食意地が張つて居るから屹度釣に掛りませうと言つて見ても後の祭り一旦忘れし釣竿を取りに歸る由

もなく残念がつて居る程に汽車は益々進行し箱根墜道を打過ぐれば降しきる雨の爲めに山の麓の木の間岩角右に左りに落來る水は皆瀧となりて玉を貫き小さけれども趣きあり、是は指す方の養老に比べて赤子のやうなものなれば養育の瀧とも命くべし

(三)

竹の屋主人

降て湧いたとは實に此事箱根山中新出來の新瀧右手の岸頭より素練を垂れば左の岩角よりも白玉を轉ばし落す、銀の蛇が草の中に昇降するかと見ゆるあれば巖穴から雪を吹き出すときもあり絶景絶景箱根は雨にかぎると云て竊に柳子を顧みれば此の赤子のやうな瀧を自分が一人で産み出した顔付しかも子自慢で

どれも皆玉を濡しらしして居りませうと澄し切たり、考へて見れば、數でこなす斯様なヒヨロ／＼瀧に玉を濡ししたり絶景々々を惜氣もなく捨ッて投付て居ては是から先の褒詞に究すべし長い旅だち互に形容も感歎も詞を少しづつ、儉約しませうと車窓より首を引こめて今度は洋盃の中へ玉を濡しらせて悦ぶうち御殿場も過ぎ佐野三島沼津にて鮎と正宗を仕入れしが是は此前鶴淵氏と來たりしとき此の停車場前の鮎が氣に入り幸堂氏と來たりしとき此の物賣の酒よかりし事を覺え居たればなり、トコロが星移りばかりか物かはりて今度の鮎は乾すばツた他店の物なれば下司はツた我輩も手を引き摺り替正宗に肩を擡めたり、左

れど偽正宗の方はスツバリと思ひきれず例の未練に壘を取り上げ注ぎかけては悲しがり茶碗を出しては愚痴を溢し取り上げながらグツト一思ひにヤツつけ兼ねためらふ躰に向座の軍人ハイ御下物と蜜柑を二個擱んで呉しは有難し、是より大きに元氣づけば空もまた時々となり薄墨の雲淡くなり行きて富士の頂き現はれたり「心あてに見し白雲は麓にて思はぬ方に晴る、富士の根」と詠める歌は實況なり富士川にかゝるころます／＼富士はあざやかになりしかも中腹に引きのこる白雲は人の手の形をなし恰も指して是が東海道評判の富士の山でございと云ふがごとし雲中にも廣告に意匠を凝らすことが流行か定めて廣告に骨を

折る者が見たら是を只置くは惜しいものと見取れるならんと評し合ふうち其の指頭は腕の方より消え行きて指先のところ人の面のごとく残りしが是も消ゆると思ふ間に一切見たら亦かはつてといふ工合に一面に羅のやうな雲蔓こりて山の姿を隠しけり山にははぐれたれど左手の海はまだ沖遠く雨降りてか黒く塊りし雲の波に近づき下りて其間わづかに白く光りたる海中より龍の上るか空より龍の下りて水を飲むかど物凄く氣高く眺められたり、興津江尻はまた雨また晴のうち過ぎ静岡にて上辨當と云へば廿五錢の鯛飯これは殊に味よし茶は注かへて貰ふに一錢なるが京都までの間茶は此の停車場が一等なりしはさすが茶處

なり、是よりまた濱松にて辨當これも上等廿五錢隅切の折に一重は飯一重は菜エホ鯛の鹽焼玉子焼蒲鉾椎茸奈良漬の香の物など皆よし茶はよからず、斯く辨當ばかり攻て居るは嘸大食と思はれんが試験の爲に二人して一個づゝ各所にもどめて一箸づゝセ、ルばかり實は辨當は咽ッぼくして胸に支て二人共腹工合甚だ宜からず汽車辨にはサンドウ非ツチ胃の受第一なり、殊に日本辨當は飯の温かみに蒸されてか煮物に臭ひの付くもの多し砂糖たるき玉子焼小砂利のごとき硬き鶏肉の煮涸しなど餘ほど胃の強き人ならでは消化まじ汽車辨今一段改良したきものなり此にて柳子正宗と誤りてラム酒を押付けられ飲ぬうちより先づ額

を押へたるは可笑かりき

(四)

柳鳩亭寅彦

各所の辨當の喰ひ競べも最初は大通の様なりしが腹工合の狂ふに至つては餘り妙ならず、予は追々膝の上に折の重なるを見るに付け石抱きの拷問を思出し辨當責の苦しきは背断割つて鉛の熱湯よりも一層厳しく切身に鹽の焼肴も今は箸を下す勇氣なし就ては正宗と誤りてラム酒一壺押付けられたる第一着の失策を真直に白状せんに此時竹翁は節酒を主張しモウ飲まぬと言はるゝまゝ予は切て回生薬として正宗の一合壺を用意して置んものと酒賣商人を呼止めたるに正宗は二合壺ばかりです一合なら是

になさいと他の酒をよこしたり壺にも大小のある上は正宗の差添に浪の平行安といふ新規な名酒があるかも知れぬと其儘に買取りたるを竹翁目早く心附き何だ是はラムではないかラムを買つて何うするのだと意外の言葉に吃驚敗亡、車窓より首を突出してラムの壺を高く差上げ違つた〜と叫ぶ途端汽笛一聲響き渡りて發車すると諸共に商人は遠ざかりぬ、斯ても尙ほ未練を残しオーイ〜と呼んで見たれど今は何の役にも立ず汽車は出て行くラム酒は残る、残るラム酒が瘡癩の種子にて空しく劫を沸しながら乗合の手前面目なく脊に汗を流したり、傳聞くにラムなる者は砂糖より取る酒なりとか左すれば予の如く甘い男が

絞^{しぼ}り出^だしたる冷汗^{ひやあせ}は自然^{しぜん}にラム酒^{ラムシウ}となつて居^ゐるゆゑ他の明燿^{あまびん}に
 詰替^{つめか}へて賣^うらば必ず賣^うれるなるべし是^{これ}より各驛^{かくえき}を過^すり行きながら
 車窓^{まじま}より四方^{よも}の景色^{けしき}を見るに板^{いた}庇^び傾^{かたむ}きたる賤^{しん}が檐^{のきば}端^はの桐^{きり}の花^{はな}
 若葉^{わかば}蔭^{かげ}ほの暗^くき山^{やま}の峽^{あび}の岩^い躑^つ躑^つ皆^{みな}取^とりくくに面^{おも}白^{しろ}く青^あ麥^{むぎ}と蓮^{れん}華^け
 草^{くさ}の遠^{とほ}く畑^{はたけ}を彩^{いろ}りたるは如何^{いか}はしき形容^{けいよう}ながら青^あ毛^け布^ふ赤^{あか}毛^け布^ふを
 列^なべたるに異^{こと}ならず左^{ひだり}ればこそ此^こ處^ち等^らより田^た印^{いん}連^{れん}がゾロゾロと東^{とう}
 京^{きやう}見^{けん}物^{ぶつ}に出^いづるなれと妙^{めう}な所^{ところ}に聯^{れん}想^{さう}し卵^{たまご}の花^{はな}の白^{しろ}きを見^みては殘^{のこ}
 んの雪^{ゆき}かと疑^{うたが}ふよりも豆^{とう}腐^ふの殼^{から}に思^{おも}寄^ひせ岡^{おか}邊^へに咲^さくとは洒^{しやれ}落^れ者^{もの}
 だど感^{かん}じなどして居^ゐるうちに此^{この}線^{せん}路^ろ中^{ちゆう}隨^じ一^{いつ}の勝^{しょう}區^くなる濱^{はま}名^な湖^こに
 達^{たつ}したり、抑^{おさ}々^{ささ}此^{この}旅^{りょ}行^{かう}を企^{くは}てし當^{たう}時^じより今^{こん}度^どの名^{めい}所^{しよめい}巡^{めぐ}りは多^{おほ}く

海^{かい}邊^{へん}の旅^{たび}なれば紀^き行^{かう}文^{ぶん}を草^{くさ}する時^{とき}にお定^{さだ}まりの青^{せい}松^{しょう}白^{はく}沙^さを封^{ふう}じた
 が好^よからうと相^{さう}談^{だん}したる廉^{かき}もあれば此^こ處^ちでは蟲^{むし}唾^{つば}の走^{はし}る程^{ほど}遣^{つか}ひ
 たき形^{けい}容^{よう}なれど禁^{かん}を破^{やぶ}る譯^{わけ}には行^ゆかず、餘^よ儀^ぎなく青^あき松^{まつ}白^{しろ}き沙^さ
 と迂^{まは}り回^りくどく言^い替^かへても褒^ほめねばならぬ好^{かう}風^{ふう}景^{けい}幾^{いく}度^たも目^め馴^なれて
 居^ゐても又^{また}今^{いま}更^{さら}に嬉^{うれ}しければ竹^{ちく}翁^{うう}拍^{はく}手^てして悦^{えつ}に入り吾^{わが}輩^{はい}の別^{べつ}荘^{さう}は
 こゝに極^{きめ}た鎌^{かま}倉^{くら}金^{かな}澤^さの間^{あひだ}にも百^{ひゃく}軒^{けん}ばかり建^たてる事^{こと}は杉^{すぎ}田^たの梅^{うめ}見^みの
 時^{とき}に定^{さだ}めたが夫^{それ}は夫^{それ}として置^おきて濱^{はま}名^な湖^この別^{べつ}荘^{さう}を一番^{いちばん}大^{だい}事^じにす
 る氣^きだと無^む性^{じやう}に喜^{よろこ}ぶ程^{ほど}もなく又^{また}々^く蒲^{かき}郡^{ぐん}の絶^{せつ}景^{けい}に撞^つ見^{けん}したり、形^{かたち}
 よき島^{しま}影^{かげ}は海^{うみ}に泛^つべるものゝ如^{ごと}く打^{うち}震^かめる遠^{とほ}山^{やま}は藍^{あゐ}をぼかし下^か
 げたるに似^にたり浦^{うら}曲^{まが}は例^{れい}の禁^{きん}制^{せい}物^{ぶつ}なれば松^{しょう}沙^さ青^{せい}白^{はく}と苦^{くる}しがつて

斜めにつらなる松原を言顯すの外はなし、竹翁こゝにても羽目を外し蒲郡にも別荘を置く事に極めた品に寄れば別荘を汽車の客車の通りに拵へ東京の友人を招待して披露の宴を開く時御馳走は御銘々に濱松の上辨當を自費を以て買調へ詰替正宗と共に御持參下さるべしと言渡し大いに汽車がつて見るかも知れぬと大氣に入りの容子なり但し酒と辨當の序にラムも亦宜しからんと唯一言も云つて呉れぬぞ中々にうらみなる

(五)

竹の屋主人

ラム酔の能くと洒落のいろはで柳子が獨り樂しめば汽車の動搖の烈しきにつれて下におきし麥酒の空壇が自然と跳るなどダ

クの線其のまゝなれば我も羨ましくなりてドレ一杯御相伴と洋盃を出せば、廢し玉へラム杯はお毒ですと意地が悪し、マアサ注ぎ玉へ今度は僕が眞個の酒を買て上るからと欺して一杯やるうち、汽車は二川停車場に着く、柳子少しトロリとなり車窓へ肱を凭せて外面を見廻し汽道が二側にあるので二川かど唸き出たり、朝の七時から午後の五時まで長い間に洒落も出たがさすが黒人として停車場の名をもぢらぬは感心だと今しも褒めやうと思ふ矢先に此二川を出され夫なら後の停車場の名で聞かせられる此方は鷺津が走るとやりかへしたくなり今のラムはお毒ですの返禮にイヨ汽道が二側がから二川の口合は出来ました恐く

是れは君が一世一代のお出来でせうと云ば柳子は石炭の煤が付いた面をシルリと撫て少し黒くしイヤ是は全くラムの故です只の酒ならこんな事を暖にも出すのではないラムて奴は不可よとラムの壘を弾てテレを隠されたり此大笑に辨當責の胸の支も癒り次の豊橋にて正宗二合壘を仕入れ是は直に吞乾し又大府にて銘を進歩といふ中國酒の四合壘を買ひ是はなまじ詰替の正宗より結構だと勢ひづくを例の向座の軍人見られて「大分御親密で……大層また飲ますナ」と詞を掛ければ柳子得たりと莞爾つきてナニ是許り今日は二人とも病氣なので一向やりません例は帆柱の如く空壘を並べるのですと大得意、ヤ夫は盛んな事だ何

しろ面白そうな御道中だ此等の地名は大分逢ふと云ふ事に縁がある大府の次が大高と云へば熱田熱田と答へる、と態度嚴格にて服装また嚴めしき將校が綽々餘裕ありて洒落られるに兩人は驚きながら又嬉しく是は恐れ入りました貴君方は名古屋へお歸りですかと話しかくれば、左様熱田と思ふと直ぐお別れ御名古屋惜しいと隙もあらせず又浴せられ、おもへば其名古屋には藤田静脩君も在任なりさだめてかゝる英雄とも出合はれる事ありて名洒落もあるならんと昔懐しくなれば此人々も又慕はしく養老の瀧行の案内を問へば養老も宜ろうしい所だ今夜大垣へお泊りなら京丸屋といふ宿が能い大垣は鰻が名物であるから今

夜申し付て置いて明日晝前養老の瀧を御覽で晝にまた京丸屋に歸つて蒲焼を味はつて御覽なさい、と深切なり斯く打ち解けては誠に其の洒落のお名古屋惜しく停車場へ着きて丁寧に會釋して別れたり、サア占た大垣通一手販賣所となつて仕舞つた能い京丸屋を忘れつこなしだと最早泊りに付いたやうな心持、あの通人が云ふのだから蒲焼も屹度宜からう此前向島へ岐阜料理といふのが出来て鰻を喰せたが蒸へ掛けないところが又異でなかく能かつたが大かた其の格だらう何にしる午前瀧見の正午が名物の蒲焼と來ては是が誠の本筋といふものだ斯う工合が能かつた日には先へ行くのは止めて寧ろ大垣の子になつて仕舞た

くなるかも知れない加之に雨はスツバリ霽たし霽たところか月が出た此が木曾川か絶景々々しかし別荘地は大垣で見立る事にしやうと月を賞するうち午後十時七分大垣にて汽車はてぬ

(六)

柳塢亭寅彦

洒落思想といふものが大有り名古屋の軍人に手を取るやうに教へられてタツタ今大垣通一手販賣所となりし兩人は停車場を立出で、宿引の提灯に目を付けオイ京丸屋お前は停車場前の支店であらうナ此荷物を頼むから船町の本店まで案内を頼むよと町の名まで心得て命を下す鹽梅は彼將校を連れて來ても是より外には言方があるまいと思ふほどの大通なり、其時宿引少しも感

心せず本店は先年の震災で丸潰れになりまして夫限り稼業を罷
 めましたから向ふの京丸屋へお越しを願ひますと鞆を受取て案
 内す、如何さま將校の話しも一昔以前養老へ行つた折の事だと
 聞いたから其積りで遣れば好かつたに餘まり通がり過て失錯つ
 たと例の一手販賣所まで丸潰れに揺崩され忽ち休業の札を出し
 てシヨゲ返りつゝ同家に宿り先づ一風呂と飛込めば夜更の爲め
 か土地の風か湯は浅くして躰を隠すに足らぬ程なり、能ある鷹
 は爪を隠し智慧なき風呂は臍を隠さず是は餘り稀代だから殊に
 寄ると仕掛があつて風呂入の名人は鳥渡何か引動かし苦もなく
 肩のあたりまでヅブ〜と這入る様な方法があるかも知れぬと

暗がりの手探りに羽目を押し底を撫で苦心する有様は我ながら
 膝栗毛の五右衛門風呂を其儘なり、石川や濱の真砂は盡るとも
 世に彌次喜多の行方は盡す此が旅行の面白味だと湯をポチャポ
 チャと遣ひながら頻りに嘘みをする所へ竹翁跡より入來り大垣
 の湯は斯うしたものと猶懲ずまに大通販賣所を再興し旅鳥の
 行水は早い所を賞翫するものだナニ臍だけ温て置けば長旅の
 へマ續に後悔して嘔む時も齒あたりが和かいから大概にして上
 らうせと匆卒に座敷へ歸り寢酒一本傾けしが明日の晝に味ふべ
 き名物の蒲焼を吩附け置くべき一大事は物に紛れて忘れたり、
 尤も震災後は鰻も鯰も鯰に變つて仕舞ひましたと言れまいものでも

無れば却て忘れたるも能かりしならん乎、斯くて兩人グツスツと寝込み明れば同月十四日詔へ通りの好天氣に仕合せよしと打喜ひ命じ置きたる人力二臺午前五時を相圖として迎ひに来るを疾しや遅しと荷物其他の邪魔物を京九屋へ預け置き養老指して出發す、此時竹翁は鞆に結下げたる淺黄木綿の袋より麻裏草履二足を取り出し名所舊跡を踐む爲めに用意の草履がこゝにある鼻緒に赤い裂を結んだ方は僕の穿物だが一方は君の分として調へたのだ使用済の後には紀念として是を君に呈する氣だが何と智恵は素晴しからうサア穿き玉へと大得意なり、予は難有く頂戴して穿き心よく車に飛乗り二臺列んで駈出す時の愉快さは大方な

らず、先が先ゆる詔掛りに風も静にならの葉のくならさぬ枝ぞめでたきと天下泰平の吞氣さ加減を祝し是は都より出たる旅人にて候口には孝行の上戸同士にて候へば瀧の水を酒と飲まばやと存じ唯今養老へと急ぎ候と心竊かに氣取つて見ても兎角手紙の文に近く更に物にはならねども唯竹翁の御機嫌克く御座遊ばされ降而小生も無事息才に大垣市中を離れる所を大出来と思ふのみなり、此日同所は八幡祭禮の由なりしが早朝なれば雑沓もせず首尾よく田甫へ乗出して雲雀啼く長土手を二里餘りも急ぎ行き川二つを越えて高田町を過ぎ山の麓に差懸れば此處より後押を要すとして車夫は我々兩人を傍への茶店に憩せ置きて其事

に奔走せり、此間に婆々が汲んで出す剃盆の茶碗を見れば箸一本つゝ添へてあるに不思議がりつゝ口を附くれば茶碗の中は砂糖湯にて箸を搔廻す爲めに添てあるなり、水も酒となる養老道は茶も砂糖と變ずるにや同じ砂糖の縁を引くラムの照應極めて妙なり

(七)

竹の屋主人

砂糖湯のみての舌打は甘いのか不味のか分からぬと昨日の汽車も節酒々々と云ひながら正宗二合壘二本と四合の進歩ラムが一合麥酒一本おまけに夜がまた二本車もあました事はなし長い道中左様呑んでは堪らぬ酒が湧き出す養老の麓で砂糖湯を出すも

前途を氣を付ろといふ神佛のお示しか今日から當分掛直なし嚴禁と我はすべしと一口で驚きし湯呑を置いて表へ出で朝風に川原と堤を車の上に縮ましたので、寒くてならぬ後押には及ばぬ歩いてやらうと柳子と共に草履珍しく立出れば、夫は大きに……濟ませんで杯と車夫は穀車曳てアラ〜と後につく、大垣停車場前より養老まで三里これを上下の車賃一臺一圓とは高しと思ひしが麓から後押の付くところがございますからと云ふに其まゝ命じたるが見ればわづかの坂道なれば暖まりと運動がてら歩いてやるなれば車夫等大悦びなり、爪先上り二三丁一巡りすれば眼界また新に開けて田跡山一躰前に近し大雨には山より瀧

のごとく落ちて川をなすとて石なだれ阪屈曲しゴロタ道成程後
 押なくては車をやるべからずと思はる、此の險しきところを過
 てまた平坦となり白石村に著くこゝは早や養老にて瀧まで十二
 町といふ車の止りしは豆馬亭といふ宿にて先づ休めとて案内す
 る座敷に通れば國中一目に見ゆるといふべき見晴し今渡り來し
 二筋の川のほか幾筋の小川朝日に映じ廣野の中に銀の細筋をあ
 らはし雲雀の聲いと晴々し、座敷に掲げし額を見れば貫名海屋
 の書にて寸人豆馬亭とあり馬だから豆も能が何様やら勝手が違
 ふ様なれど由縁を聞たら漱石沈流の負惜説もあるならん此の家
 が豆馬亭と名乗るからにはソコは萬々大穿ち聞くのが野暮で瀧

へ早く行くのが通、酒肴は瀧の所へ持て來て呉れど先刻の禁酒
 をモウ忘れて諸事心得たる姉さんに導かれて瀧へと行く早や是
 より山の中にて櫻樹多く植付たるは公園となりたる志るしなる
 べし春は眺望も一入と云へど若葉の陰また趣きあり左手の岨を
 見下せばこれも山水の押流す石のなだれ物凄し三町四町と進む
 に随ひ登るにつれ奇しき巖こゝかしこにそばだちつらなり面白
 き松の根をあらはして其岩に纏ひたる名を知らぬ草の花の色よ
 き鳥の聲のすみて響くなどそろく仙氣がさして來て我ながら
 腰のあたりを擦ツたら木葉を綴ツて巻き付けては居ぬかと思ふ
 ばかり心清み立止りて松風かど耳を立つれば瀧の響なり嬉しく

も近づきけりと巖傳ひの谷川をヒラリと飛び越え先に進めば柳
 子も劣らずヒヨイ〜と岩飛の藝も仙術を得てかいと輕し、見
 下す山道に躑躅咲けば見上ぐる梢に藤の花あり老鶯も養老の
 流に咽を濕す故かいと若やかに聞えたり、聞ゆる響きは地にも
 轟くやうにて少しく膽の冷るに肌の涼しさは瀧にかゝりたる如
 し、ドウモ實に仙境だ此の溪流には玉を溜しらしを用ひても惜
 しくない此の巖には山篇の字を二字つゝ重ねなくては形容がむ
 づかしい苔滑かにしてといふのを用ふつもりで考へて來たが生
 憎はげしい流に洗れて巖に餘り苔がない夫でも水に浸つて居る
 ところを撫て見れば随分滑かだ杯と實地作文法といふものを研

究中、ソレ其處から瀧が見えますと教へられ重疊たる岩の間よ
 り仰ぎのぞめば數條の素絹を束ね垂れたるごとく脚下の溪流は
 また綿を繰に似たり

(八)

柳塢亭寅彦

まだ瀧壺までも行かぬうち遠目に仰ぎし木の間の素絹既に十二
 分の趣きがあれば萌しかけし竹翁の仙氣今は全くの眞物となり
 モウ下界へは降らないよといひさうな氣色あり、是より瀧を見
 物せし後左様ならと言ひも敢へず雲に乗つて仕舞はれては道伴
 の者が心細しと他の仙氣を頭痛に病みしもホンの常座の事にし
 て果は面白さに我を忘れ早く瀧壺へ行きませうと又岩飛の放業

以前よりも身の軽きは愈々仙術 上達だと兎角予をも仲間内へ
 引入れんとする下心は竹翁仙人の悪戯なるべし、儘よ世間は廣
 くして目あき仙人もあれば目くら仙人もあつる習ひなり予は目く
 らの瀧覗き絶景の真味も解せぬ癖に忽ち仙人がらるゝ譯ゆゑ裕
 をまげて鯉となすをも石を打て羊とする仙術に比ぶべく随分灰
 吹からも蛇を出せば瓢箪の駒に劣りはせじと無理に通力を敷へ
 立て仙人交際をするやうな不思議な羽目となりしもおかし、序
 に瀧見の案内者なる豆馬亭の姉さんも此仙郷に住む上は豆馬仙
 女と名乗る位の義理はある筈なるに相應はぬ形の引掛帯和か物
 の前垂を山風にひらつかせ諸事意氣がつて先に立ち少しく俗氣

を加味したるは心行かぬ様なれど謡曲の本文にも薬の水くくと
 頻りに薬がる美泉なれば斯ういふ調合もなくては叶はず登山の
 者を一人残らず皆仙人に仕てのけては人間種が盡きやうと唯一
 味の凡俗を以て好き程に仙氣を押へし天の配劑妙なるかな、此
 時姉さんがアレーと一聲袖もて顔を掩ながら俗聲を發したるに
 兩仙人膽を潰しオイ何したへと尋ぬれば蛇がくと言ながら青
 葉繁き木立の下の巨巖の根を指さしたり、見れば一疋の小蛇鎌
 首をあげ此方を屹と白眼んで居るゆゑ予は大いに癢に障りモウ
 仙人を罷めて武者修行に宗旨を替へるのだ養老山中の巨蛇退治
 と來た日には大薩摩物で威勢が好い尤も見掛は小さな蛇だが大

蛇も功勞經た奴は時々小蛇と身を變じ遊んで居る例しもあるゆゑ須破退治つけやうとする日には山鳴り震動すると共に四斗樽ほどの巨蛇となつて百煉の鏡の如き兩眼を光らせ口より炎燄を吐きながら抗て來るに相違ない和有合ふ石を拾取り腕まくりして身構へしながら此飛道具で仕留めて跡が直ぐに黙闘といふ詭へだが仙人と武者修行の争ふ中へ小意氣な女の搦むのは些と取合せが妙でない夫よりも日中の黙闘がモット不思議だと云ふ人も有うが近眼鏡を取外せば眞晝間でも探り廻り空を拂つて挑み合ふに差支へのない兩人だから其處は調法に出來たものサと無駄口を叩きも敢へず石を投げんとしたるに女は達て廢せと

いふイヤ夫でもどあらがふを竹翁に制せられ餘儀なく小石を打捨たるは返すくも殘念なりき、首尾よく退治する時は縦し芝居にはならぬにもせよ浪花節には珍重がられて名を末代に傳ふべきに命冥加な巨蛇なりけり、斯て石高道を登り養老の瀧の前に出れば此處に掘立小家の茶店あり如何にも山中にうつりの能き色黒の女が居て手織木綿の裾短かに切草履を踏鳴し豆馬亭の女中と共に瀧見の都合の程好き場所に椽臺を運びませうと前後を手舁にして彼方へうつし此方へ戻し瀧の飛沫のかゝらぬ處に据直す折しもあれ豆馬亭の小女が酒と重箱を携へて喘ぎく追來り是へ置きますと言ひながら例の姉さんに會釋してそこく

に歸り行きぬ、瀧の音は轟けども山靜かに人氣少なく此あたり
に居る生物は翁と予と茶店の女さては姉さんと先刻の蛇と鳥に
蟻位ものものなるべし

(九)

竹の屋主人

養老の瀧の高さ八九丈幅七八尺もあるべし漲り落る勢ひは凄じ
けれど瀧壺はいと淺く膝の節は過べからずしかも一枚巖にて浴
るに危ふからず左れば盛夏の頃は遊客多く婦人といへども是に
うたれ頭痛など直ちに愈るといふ但し此瀧にかゝる前には鯨を
喰ふべからずとの云立、歸つて鰻を喰ふは差支ないかどの樂屋
落瀧の響きに聞えざりしは幸ひなり、こゝ山深からず高からず

樹間より日影洩れて明かなれば陰森として怖氣立つ程にはあら
ず余の如き弱蟲にても熱き時ならんには必らず一浴せしならん
に生憎山路の朝風に寒さ覺えて幾度か襟搔ぎ合すほどなれば瀧
近く進みては飛沫冷たく身ぶるひされて飛び込む勇氣更になし
併し予晴天大聖が身を跳らして瀧に入りなば直ちに花果山水簾
洞にかへりてもどの猿になつて仕舞四國廻りが止になるべし先
づ今しばらくは人間と化けて居ざるべからずとヂツト堪へて瀧
を見上げざるにても此瀧元正天皇の御時より世に知られ帝の行
幸をさへ忝なくし年號をまで改められ養老の瀧といはれしよ
り今に至るまで一千八百八十四年斯くの如くの絶壁より斯の如く

の大巖の上に流れ落ち休まず盡きず此末もまた幾千年斯くの如くにあらんと思へばいと神々しく潔よく思はれてしばしは我を忘れたり、此間に柳子は寫生帖を取出し其真景を寫したる其圖は即ち一昨日の紙上に掲げたり、本家の彌次喜多即ち一九の自畫なれば今度の此行自畫なくんば有る可らず一番隠し藝の丹精の妙術といふ者を墨汁一遍摺にて世にあらはさんと柳子の勢すさまじくニヨキ／＼たる巖さへ見れば彼へ二三羽鶴を飛ばせれば蓬萊山になるが彼山に松があれば蓬萊山になるがと汽車から眺める景色にも謔語のやうに夫のみ云ひ目につく山も岩も皆な蓬萊山ゆゑ夫では往來山で盲目が探しても賞牌はむづかしいと

云へばナニ嚇かしで金牌ぐらゐるは取ります此節の流行で紙へ水を打かけてソコへボタ／＼と墨を垂らして刷毛でこすれば襖の雨染が自然と山水に見えるやうなもので賞鑑家が意匠奇抜想を描いた／＼と想がツて呉れます今度くわい畫の會があれば出品して世を驚がすつもりしかも賣價は百圓ですが若しぐ眼者がなくて約定済とならない時はお氣の毒だが君が買人になつて呉れ玉へとは怖い約束なり、瀧の流れに面を洗ひまた手に掬ひて飲むに其味ひまことに美なり、左れど昔話しのやうな酒の臭はなし是で酔へば足元は養老々々と昨日の通人に直に洒落らるゝなるべし何しろ老も若くなるといふ美泉を矢鱈に呑んでオギア

くどなるやうでは大變と瀧のもとを去りて床凡にかけしがよく思は先刻の小蛇も柳子が云るゝ大蛇が身を變じて小蛇となりしにはあらずして古は八岐の巨蛇と兄弟分ぐらゐなりしものが此瀧の邊に住み這ひ巡ッては瀧の流を呑みたる爲め漸々に若くなつて今は小蛇となりしならん今見るところ二尺ほどなりしが年々一寸づゝ若く縮まつたものと假定めると養老元年ころは其丈十四五丈もあつた大物なりしならんかゝる劫を經た靈蛇を打殺さんとせし柳子は血氣の勇者是を止めし我こそは陰徳を施せし仁者なれと山を樂むこと大かたならず

(十)

柳塢亭寅彦

陰徳を施せし仁者の事とて只管山を樂むのみか翁は又美泉の爲めに巨蛇が漸次に若返り小蛇になりし事までも發明したほどの智者なれば水をも樂しんで舌鼓を打ち君も飲んで見玉へと一かたならず美味がられたり、仁者智者を一手に引受けた上は山でも水でもお樂みなさるが能いが拙者は酒を樂しむゆゑ先づ一杯遣りませうと重箱を開かせ猪口を取り姉さんに酌をさせて二つ三つ傾むけながら何うです遣つて見ませんか瀧見酒は格別ですよと竹翁に勧めたれど折角の水の味を消すでもないぞ承知せず想ふに美泉の効驗著るしく後へ年を取る程なれば何事も逆に行き水醒めの酒は素敵だと喜ばれさうな筈なるに左様でもない所

を見れば此水餘程美味きならんと予も少々好もしくなり茶店の
 女が瀧壺より汲來りし水を貰ひ三四杯試みれば如何にも心地清
 々しく喫煙禁止の年頃に立戻つては居まいかと片手に持つ巻煙
 草を見て氣を揉むほどの始末なり、姉さんの説とてここに據れば
 此瀧の水よりも養老神社の前にある菊水の瀧の方一層の清水と
 見え炎暑燻くが如き時節でも氷のやうに冷たけれど此處のは盛
 夏の頃に及べば生温くなると云ふ、左なくとも其時分は多くの
 男女が浴るを以て口に入れるべきものにも非ず飲むには今か春
 秋か人間の膏や垢に濁らぬ時に限るゆる養老の水清まば以て我
 腸を濯ふべく濁らば以て我五臓を濯ふべし今は予も竹翁に

かぶれ酒が厭になりしかば瀧に名残は盡ねども一先づ此場を切
 上げて菊水を見んものと案内の女中に従ひ岐路を四丁計り東の
 方へ分入れば若葉隠れに神さびたる養老神社の社殿あり境内の
 池に噴出す菊水の清き事は水晶に異らず溢れて苔蒸したる岩石
 を傳ひ年古る杉の間を縫ふて雪を飛し絲を亂し一つの瀧となり
 たる有様大きからねども幽趣ありて中々に面白し、此水の本店
 と思はるゝ唐土南陽縣の菊水の下流を汲んで飲む者は長く齡を
 保つとかや我朝岐阜縣の菊水も夫に劣らぬものなれば是非酌ず
 んばあるべからずと女中に猪口を取出させ竹翁先づ味はつて成
 程これは上等だサア一つ厭じませうと手にさせば押戴き水も先

刻から大分過ぎました。口が變つた。あれは格別ゆるお辭儀なしに頂戴します。オットそんなに汲上げると散ります。と悦に入り暫く獻酬に時をうつしぬ。是を水盃といはんには老も若やぎ命も延ぶ。目出度づくしの中に在つて甚だ不延喜の如くなれど此山の絶景も一期に二度見る事を得べきか。若し好き機會のあらざりせば今が別れとなる。譯ゆる強ち禁句と誣ゆべきにあらざと長命の爲めに酌む猪口に離杯をも兼帶させ飽くまで名残を惜みし。後イザ豆馬亭まで歸らんと公園内を迂回つて行けば風情もなく手入を届かせ俗張りたる花など栽て庭めかしたる丘の上。に岐阜大垣の有志等が建てたりといふ。某俱樂部の高樓あり園

ひの外の細流れは瀧の水の由なるが斯る俗地を遶り行くは可惜物といはざるを得ず。去るにても水なるものは何處までも温順しく方圓の器にも公園の形にもしたがり居ることやさしけれ

(十一)

竹の屋主人

菊水は瀧の水より清冽にして實に命をも延ぶべきものかと尊くついでない歌といふものを唸く。「老の影うつるもよしや汲て今のめば若ゆときくの眞清水」此の養老神社を土地の者は菊水天神といふといふ。一鉢瀧の水が美泉と稱されて元頭へ塗れば毛がはえるといふほどの効能があるのか。此の菊水が白髪を黒くする利目のあるのか。むづかしい本で見ても只「當耆郡多度山美

泉」どあるばかりなれど三浦千春の美濃奇觀にはたしかに美泉
 とは瀧をさした事で菊水は後に出たものだといふやうに記して
 有り成ほど當者郡も此の瀧あるよりの郡名で萬葉集に出た東人
 の歌にも老も若ゆといふのは此瀧の瀬とあるにて確なるが此に
 一つの疑ひは此の泉が孝行の徳で酒となるといふ一條が古今著
 聞集に出てある夫には元正天皇の御時此國に孝子がありて貧し
 い中にも父の好む酒をすゝめしが「ある時山に入りて薪をどら
 んとするに苔深き石にすべりてうつぶして轉びたりけるに酒の
 香のしければおもはずに怪くて其あたりを見るに石の中より水
 流れ出る所あり其色酒に似たりければ汲て嘗むるにめでたき酒

なり」これを汲みて父を養ひ此事天聽に達して帝行幸あり年號
 も養老とあらため其孝子は義濃守になさるゝ由なり（「の中は
 本文のまゝなり十訓抄の文も略同じ）これによれば酒と呑まれ
 しは瀧にはあらで今の菊水のかたあたれるやうなり大日本史孝
 子傳にもこれを採りて記されたり續日本紀には美泉の疾を癒す
 ことあれど酒の事なくまた孝子の事もなし酒の話は美泉は醴泉
 といふ此の醴の字あまざけとも讀むよりして酒とは作りこみし
 ならんか萬葉集に出でし東人の歌は元正天皇の養老元年より廿
 五六年後聖武天皇の天平十二年に帝にしたがひて此瀧に來たり
 し時によめるにて此時古へよりなと云ふを見れば此瀧の事は

元正天皇の御時より早く世に流れて名の聞えたるにて元正女帝
 此へ行幸まししく其の泉御病に効験ありしより年號を改め瀧も
 養老と名づけられしならん謠曲に雄略帝の御時とせしは東人の
 歌の従古とあるにはかなへるやうなり所詮は一山から出る水瀧
 は日をうけて夏温くなり菊水は樹蔭の巖間より流れて冷かなれ
 ば飲むべきは此の菊水の方かと思はれたり、聖武帝行幸の折は
 大伴の家持も東人どもに御供にて此にて歌は詠みたれど酒の
 氣はなし、惜むべし此時親御の旅人卿が存命にて（旅人卿は天
 平三年薨す）御供のうちにあしならんには酒の方に力を入れ
 て此方は水此方が酒と喇分けられし事もあらんに家持といふモ

チの方で其詮議には及ばれざりしならんか或狂歌に「其昔し養
 ふ老が下戸ならば餅にやならん瀧の白玉」柳子と我等は是が非
 でも瀧でも泉でも古でも今でも何でも構はず酒と汲まれん方に
 左を祖ぐべきに噫兎にも角にも昔は親孝行の者が多かつたので
 水も酒となつた事があつたのに今は親不孝許り多いので酒の方
 が水ツぼくなると歎いて見ても追付ず逝くものはかくの如く流
 れて出る水と共に仙境をはなれて俗世界に出で豆馬亭へかへり
 柳子ばかりが樂しみし重詰と酒は車夫にとらせ我々は何處まで
 も水がりて用意の壺へも流を汲み入れイザ是をもて京の水と飲
 み比べんと立出しは午前の十時頃なり

(十二)

柳塢亭、寅彦

老人の若ゆてふ水を饌に汲入れ車夫の支度の整ふを待つて豆馬亭を立出るに下り坂とは言ひながら車の疾きと矢を射るが如し是一つには我々が飽までも水がつて僅かに一二杯口を附けし酒と下物を残らず與へ供待の間に樂ませしゆる勇氣日頃に十倍し漸く景氣づきしものなるべし、此時の車夫の心を思ふに養老の水よりも矢張米の水の事だ昔しは孝子があつたゆゑ養老と改元したさうだが今は好い客があつて正宗を飲せて呉るから年號を正宗と改めたいやうだと感じたるに相違なからん、此勢ひを以て挽く事として石なだれ坂ゴロタ道では竹翁も予も車上に躍り今

にも投げ出さるゝかと殊の夜心配すれば折角若くなりかけし美泉の徳もフイになり一時に年が寄りはせぬか又老の影うつるもよしやと珍しく詠せられし竹翁の歌も仇事とならば實に詰らぬ話だと二道かけて思惱む敷島の道石塊道、まだしも少々待みになるは彼の饌詰の水にして是をチビ／＼用ひて居れば心配の都度老けて行くのを毫しづゝは恢復されると聊か心も慰むほどに車は案外無事にして嶮しき山を下り行き高田の町をも跡に見て麥畑の打つ／＼長堤の上を走るに雲雀しば／＼足下より立ちぬ總じて大垣養老の間三里ばかりの道程は大概堤を通る事として百姓の荷車も製作異り梯子に車輪を取付けたるが如き奇妙なる者

なれば七臺八臺續く時は長さ測り難けれ其幅を見れば甚だ細し
 是則ち細く長く稼ぎますとの意味ならんか堤は辛くも此荷車と
 人力車をかけすのみ故双方行合には急がれず、多くは人力車の
 方立止り是を遣過す習ひなれば蒼蠅さしと煩悶かしさは堪へら
 れぬばかりなり、兎角して急ぎ行くうち細長車と正反對に太く
 短かく暮すで見ゆる二三人の大俗物お白粉臭き怪美人を同じく
 二三人ほど引連れて車上ながら笑ひとよめき養老の方を指して
 眞一文字に走るを見しが男も女も誰あつて孝行らしき顔はなく
 却て大事な親達を苦めさうな連中なれば既に竹翁も歎じたるが
 如く今の世は酒の方が水ツぱくなる道理にて義理にも瀧が此手

合に對し酒にはならぬ筈なるべし、若し又お袋の臍操でも引
 出すべき了簡を以て俄孝行のおはむきに瀧の水を汲む時は酒の
 香は扱置いて其水忽ち火と變じ焔炎々と燃上らねばならず是に
 驚く不孝者が 翻つて白い齒を出し男親の臍を嚙らんとすれば
 臍にも亦火が燃えて餓鬼道の食はぐれに生涯詰らぬ者となる事
 知れ切つて居る話しながら其處は思はぬ道樂、女連の養老行場
 處もあらうにと淺猿しかりき、程なく大垣の市中に入ればこゝ
 は又祭禮騒ぎに不孝者等が揃ひの衣裳お納戸地に竹の染扱は親
 が入費に苦しめし憂節もしげく見ゆれど當人共は夢中にて愈々
 酒を水になし山車も二三臺飾り付けて太鼓の音響々と響かせて

は居りながら未だ正午前の事なれば練歩く模様は見えず、我々は軒毎に献燈或ひは奉燈と記したる大提灯を掛つらねし町々を駈けて通り左まで混雑の場所にも出逢はずして首尾よく京丸屋へ歸り着きしが此時十二時前にして思ひの外に早かりしは全く車夫の大出来にて其原は酒下物に在り都てのものが一様に酒を水にする中に此酒の効能ばかりは遂に水にならざりけり

(十三)

竹の屋主人

大垣より京都へ向ふ汽車は十二時五分の發車なり豫ては此處にて名物の鰻といふ腹づもりなりしが水とはならぬ酒の効驗に車夫公の勢ひよく十二時少し前に京丸屋へ歸りつき眼前に京行の

汽車が煙を吐いて居るを見ては此處でヌラクラしても居られず此の汽車に直ぐ乗るからと急ぎ勘定して出れば宿の者皆な丁寧に女中は荷物を持ちて停車場迄送り汽車の出るまで見届けて一禮して歸りたり昨夜着しときも最う御夜食もお濟でございませうから半旅籠になされますかど爲を思つて呉る深切他には随分眺へぬものまで並べ立る暴利屋が有るに客に冗をさせぬ注意は感心とイヤお前の所の御馳走を是非喰べたいのだと酒も命じたるが今日の送り出し方も行届きそれで勘定書を見ると旅籠料は一人五十錢なり物價騰貴の今日あれだけにして五十錢は廉極まる是も偏に昨日乗り合した軍人のお蔭だ旅は道連汽車の酒、

酒から話が出て大垣通となり今日は又酒ゆる車の廻が早くて鍋合せに汽車の間に合ふ嗚呼酒の徳大なるかな併し名物といふ蒲焼を味はぬは残念後日鰻通に出合しとき「道中にて鰻は喰べ玉ひつや」と聞かれ「大垣にて鰻を嗅ぎて候ひしやらん」杯答へんは最むづかしき事なるべし、又つらくおもふに酒を吞せたる爲め車が速かつた譯なら遅い汽車には油のかはりに酒を注たら能らうと云へば、柳子すかさず成程それは至極の道理だ昔し道中する人が足へ焼酎や酒を塗たのは早く歩く爲で水滸の神行戴宗も甲馬を酒精へ浸して用ひたものであらうと云れしには一太刀切り込れたり、汽車は垂井を過ぎ關が原に着く畑竹藪柵林

のほか折々本街道の松並木に出で彼の林が権現様の御陣跡だ彼の杜こそ確に床几を立られたところとあてなしに指すに柳子はウンウンと生返辭して旅で居ながらまた他の華胥の邦へと出かける様子なり、憶へば二十二三の頃此邊を過りて關が原の古戦場をたづね垂井へ来て金蓮寺へ廻り八犬傳に由緒ある安王春王などの位牌を拜しなどして歸りの道をあやまり本街道の垂井と大垣の間へ出しころは夜も十時に近く足は勞れる腹は減る詮方なしに夏草押分け並木の松の下に寐轉び月を仰むけに見ながら蟲の音を聞いて半分は往生氣になつた事もあつたが其の勞れた道はと窓から見ると一宿二宿通り越す汽車の便利は樂なかは

りに故跡は残らず、竹屋上人寐轉ひの松も伐られて鐵道の枕木にでもなツたかと少し濕ぼく腕を組むうち長岡醒が井を過て米原に汽車は止まり柳子欠伸ながら最う米原ですか是から湖水が見え出して極風流な事になりませうと云ふ折ガタンと戸を排してゲラ／＼ガラ／＼ドヤ／＼と六個の妖怪跳り入る不意の魔障に晴天大聖慌てゝ爲すべきやうを知らず只眼を睜るばかりなり

(十四)

柳 鳩 亭 寅 彦

入來りし六個の妖怪中二人は男にて肥満りたるは熊の精の如く瘦せて洋服を着たる禿頭は鹿の化物に似たり残り四個の女怪は狐たること疑ひを容れず色糸にて縫紋したるお召縮緬の袷の裾

を無作法にひらつかせ投るやうに腰を掛るもあれば他人の荷物を勝手に押除け何やら京訛りにて饒舌くるもあり、男の妖怪は最も無禮にて泥だらけの洋傘を荒々しく棚へ乗せ網の目より土を落して我々に浴せながら濟ませんの一つも言はず、日和の事には通力自在の晴天大聖も恐縮し只眼を睜るばかりにて難儀を極むる有様は五行山に壓へられ饑る時は鐵丸を喰ひ渴する時は銅汁を飲み纒かに命を保ちし折のみじめさに異らず殊に寄らば棚の洋傘に唵嘛呢叭咪吽の六字があつて大聖を苦しむるにはあらずやと不測に思ふ位なり、妖怪等は猶委細構はず客車内を我物顔にトチ狂つて笑ひ興じ巻煙草の吸さしを女の手を押ッ付

けてキヤツ／＼と騒ぐかと思へば兩方より足を出し引掛け合つて狂ふなど傍若無人の振舞に車中一同顔見合せ苦笑ひする程もなく又指相撲が始まれば、總て京都あたりの茶粥連は斯ういふ事を得意がり毫しも恥と思はぬ由は聞及んで居たれども各人の昇降する汽車の中では餘りならずや既に大聖の通力も及ばぬとあれば我猪八戒も時に取つて用ふる場所のなきにあらざる憎九齒の釘把は持ねど十本の指の爪は伸びたり此得物を以て妖怪の顔を搔削つて遣りたしと腹は立てども手向ひもならず只管胸を悪して大聖の方を見返れば益々弱つて頭重氣なり抑々大聖の頭は天宮に捕らへられし時乾坎艮震巽離坤兌の八卦爐中に鍛練

し宿醉に悩む時は函館 氷人造 氷の氷囊に冷し火水に堪ふる程の頭なるに今日の京談にはかなはぬかと問へば何うして／＼立切れぬお蔭でムカ／＼するやうだと用意の散薬を取出し彼養老の水を以て服用すること荐りなり、ムカつく時は散薬を服し渴する時は養老の水を飲み此罪業の滅びる時節を今か／＼と待つ程に汽車は追々進行し琵琶湖の景色眼前に現るれども妖怪等の頭に遮られ真帆も片帆も山影も飛々に見ゆる譯ゆゑ思ふやうには眺められず竹翁も窮屈な中よりソレあれが三上山だソラ瀬田が見えるであらうと間なく予に教へらるれど相變らず妖怪等の喋々喃々が邪魔になり話聲さへ聞取り難し、今若し田原藤太秀

郷を地下より喚起せるものならば三上山の蜈蚣よりも汽車の中
 の被嫌者なる蚰々の退治を頼み鐵に唾を塗る手數もなく紙にく
 るんで一昨日來いと投げ出して貰ひたく惱みに惱み抜きしより
 今宵は京都で瀛車を乗替へ宇治泊りと思つて居たが疲れ休めに
 京に下車し蒲團來てゆつくりと東山の方を枕とし足腰を踏伸す
 もマンザラ悪くもないやうだと弱い音も出掛けしが兎角は京都
 停車場へ着いての上の分別とアヤフヤに相談するうち大谷山科
 疾く過ぎて稻荷驛へ着すれば車窓の向ふに朱の玉垣手に取るや
 うに見ゆるにぞ女怪等車内より拍手を打ち人聞き悪き願事を聲
 高くならべ立て噪がしき事大かたならず今一丁場にて京へ着か

ば此連中とも別るゝならん夫のみを望むに付け少しも早く進行
 させたく我々兩人飛下りて汽車の跡押しを爲すならば必ず其甲
 斐あるべしと心筋かに思ひし程なり

(十五)

竹の屋主人

女怪彼等も都の生れならんに少しも優しき節はなく四五人も座
 を隔てながら拳を打つ踊る真似をする口三味線で歌を唄ふそれ
 にもまして肥満の熊精禿頭の鹿妖この女怪等と相戯れて或は膝
 に抱き上げ或は頭に纏ひつき其の猥雑まことに嘔吐を催しぬ、
 我等より特に一段迷惑なしたらんと氣の毒に思はるゝは新橋よ
 り同乗せし病者と其が付添人なり此兩人は昨日豊橋にて下り今

日また豊橋より乗り継ぎ大垣にて我等同室へ乗り込みしゆゑや、親しくなりて氣のおけぬ程の詞は交し動搖烈しき汽車はさぞ氣分悪しからんと思ひやるほどなりしに此の六個の妖怪定員以外に詰め込みてしかも斯く魔風を吹き立ることなれば病人は手拭を顔にあてゝ窓に俯向き附添人は身をもつてこれを擁ふといふ有様いかに苦惱のまさりけん、形で騒ぎ口で叫く妖怪共さだめて酒に酔狂ひての事かとおもへば皆素面にての殻騒ぎ恥といふものは鴨川へ晒しつけて「大事おまへん」と餘ほどの人間外れなり、自ら名乗る晴天大聖も金の箍をとつて降参し八戒と稱する柳子もじならぬ釘把を投げて歎息するのみ、惱まされた子

驚いたよとは、停車場に汽車がついて漸く魔障をのがれ兩人が吐息と共に出せし詞、彼の病人は如何したらう、何だか惘然としてわからなくなつた彼様いふ妖怪の棲む京都にはとても入られないから奈良鐵道へ乗り替へて直に宇治へ逃げやうとアヤフヤの分別がまたアヤフヤとなり例の人間の萬石通を奈良鐵の方へ下しは午後の四時過頃四時二十五分には奈良鐵が出る筈と二人シヨンポリ立て待たが驛夫も見えねば乗客も見えず聞合す人もなければ手提を地において是れがホンの手持不沙汰と顔見合せるばかり、ソロ／＼棕馬に羽が生えて来たぞ汽笛のかはりに閑子鳥を啼かせるやうな鐵道には乗りたくない若葉の東山を見

棄ては行かれまい毒蟲に整れたとき其の毒蟲を潰して擦り付け
れば癒る格で妖怪に惱まされた時には其の妖怪の住む地の水を
飲むと免疫となるやうな事があるも知れぬ今後は京へ泊るとし
ませう、成程それも又名案と何でも一案出れば夫は名案と暗雲
に名案がり又一案出せばソイツは極めて名案と直に同意し無定
見無政策無條件無々無々の成行次第といふ我々なれば又逆戻
りに架を渡りかへし停車場の車夫組合より二輛仕立させ十五錢
づゝの切符にて三條小橋の萬屋まで曳き出さすれば車夫は三
四丁走ると車を緩め旦那明日は御見物かと問ふ、イヤ通り抜け
だといふと、旦那三條では大層遠うございませう旦那は始めてい

出なさりますかと愈々棕鳥を眞物にして仕舞ふ様子、うるさけ
れば取合ず居ると柳子を乗せし車夫後より追すがるやうに曳き
ながら萬屋は道者宿で旦那方のお泊りなさる所では有ません夫
に評判のよくない家でモシ旦那能いお宿がいくらもございませ
モシ旦那、と強情なり、道者宿でも結構だ萬屋は親の代からの
泊り付だ、へエ萬屋も二軒ございませうが何方のでございませう
シ旦那萬屋は始てのお泊りでございませうかモシ旦那旦那は何方
からのお着でございませう伊勢からのお着でございませうか、と是
には棕鳥も疳癩があこり、グズ／＼云はずに定めた所まで曳け
ど一喝せしに始めて口を閉ぢしが後に聞けば七條停車場前には

大げさなる悪車夫ありて棕鳥を苦しむること一方ならず甚だしきは強迫して暴利宿へ引張り込むといふ、怖しき事なれど其の取締りは一向に届かず悪車夫暴利宿の勢ひさかんなりどか何處も停車場前は棕鳥の網に罹るところなり午後五時三條小橋の萬屋へ着く

(十六)

柳塙亭寅彦

加茂川の水、雙六の殿、山法師、これは我が御心になはぬものど白河の院も仰せなりけるとかや今は山法師よりも七條停車場の悪車夫が始末におへぬものとなり加茂川の水の方は却て疏水運河につかはれ人の心に任するに似たり、扱敷といへば道中

雙六一つ餘つて大津まで逆戻りをするやうな不都合もなき汽車旅行首尾よく上りの京都に道入つて悪車夫の網を蹴破り豫て竹翁の泊り付けなる三條小橋の萬屋へ着きしが此日は葵祭のよしにて泊客の多ければ左しもの大家も一杯の大混雑兎も角能き座敷の明きますまでエライ不都合では御座りませんが假に是へといふ事にて表二階の小座敷へ案内せらる、ヤレ／＼今度の旅行は能くお祭に出逢ふ事だ大垣でも喰つたが此處も亦お祭か何は格別疲れ休めに泊るのだから何んな座敷でも構はぬと足投出して席に着き先つ茶を飲んで京の水を味へば妖怪に吹掛けられし毒氣も自然と失せ果てたり、サア斯うなれば日の暮れるまで宿

屋の二階に茫然と閉籠つて居るでもあるまい既に京に上つて居るゆゑ此處で癡痺を切らす時は癡痺其物の行端がなく迷惑するであらうから若葉の東山をぶらつき歸途に通な所へ寄つて所謂「ひる」でも喰はうではないかと京都通の竹翁が相變らずの例の名案成程今度の名案は大極上といふ奴です僕も一昨年大阪、堺奈良と廻つて此地に入り名所も少々見物したが智恩院あたりは何うも言へぬ景色であつた其の節大阪朝日新聞支局の櫛田五峯氏に案内せらるゝ筈であつたが氣短かに同氏を出し抜き勝手に東山を駆け巡り人の厚意を仇にした報いは顔面飛んだ方へ道を迷ひ往來人に方角を尋ねたるに貴方は大津の方へ行のではない

のかと言はれし程の失策ありお蔭で少しは道も覺えたれば何だか懐かしい様な氣がしますと無定見無成策の古疵までも白狀し支度そこく萬屋を出立で三條大橋を渡り行きブラリくと歩く姿は我ながら呑氣にて見當り次第長梯子を買取りさうな風情なり、斯くて東山の方へ廻り行けば當山第一の巨刹と聞えたる淨土宗鎮西派の總本寺智恩院の山門は松の葉越しに巍然と聳えて背後の山の若葉青葉に取り圍まれたる好風景言知らず面白し、何も氣味わるく風流がつて理屈をならべる譯でもないが着物裾を切らすまいと片襦からげた京女郎が紅い禪子をひけらかし妖精的の男と一緒に彼方此方を徘徊するのが何分にも氣障

だから此處は夜更けて淋しい時月を踏んで遊びたい土地だ嘸ぞ
 郭公も鳴くであらうと兩人は磴道の上に散布く枯松葉を踏した
 き山門の下に這入つて立派な門だ剛義な門だと無情に門を褒め
 しのみにて彼の廊下の鶯張檐先の傘は餘り初心らしきゆえ此
 度は見物せず、若しも有名な傘をハ、アあれが魔除かど口を開
 いて仰ぎ見なば京通も赤毛布を學ぶさうだ掠鳥張が出来て見る
 ど鶯張も恐れるだらうと人の批判もうしろめたさに本堂の方
 へは足を進めず確かあちらの方に當つて鐘樓堂もありましたと
 指差しばかりで事を濟せば竹翁も打點頭き左様々々鐘があつた
 と互ひに足が脇道へ向くは鐘が鳴るか撞木が鳴るか鐘と撞木の

相成るべくは外を見やうといふ心の一致、別段相談にも及ばず
 して自然に斯うなるとは無雜作なものなり

(十七)

竹の屋主人

花よりは若葉に住まん東山、とよみし桃下といふ人はよく東山
 を知る者といふべし、花頂山の若葉陰只ウツトリとなりしが南
 禪寺なら知らず智恩院の山門の下に臥て仕舞ふわけにはゆかぬ
 とブラリと祇園の方へ出るに明日の葵祭のほか何やら共進會
 褒賞授與式もあるとかにて市中をはじめ東山邊もなか／＼の賑
 ひクチな折詰をぶらさげて氣障な手つきで往來を踊つて歩く妖
 精も少からず若葉より人ぞ湧き出る東山、と涼菟の匂も思はれ

て祇園あたりの夕風肌に涼しく何やら物懐しくて嗚呼西京は土地は能いところだと聲に立たり、柳子は京の水で妖怪に吹き掛けられし毒氣忽ちうせたりと云れしが予は妖魔の氣にかされし事烈しかりしと見えなかな、毒氣醒めず京通は胸痛となり心痛きこと堪へがたく家鴨など洒落る勇氣なく四條通りをトボトボと歩むに柳子は一力を覗き込んだり遊客御案内所の札を讀んだり只々恐悅の様子なり是なら長梯子を買ても冗にならぬ鼻の下へ掛けたら能からうと思ふくらゐやがて四條の橋にかゝり西頭に膝栗毛を引き向けて半渡りて欄干に倚り嗚呼西京は景色は能いところだと恍惚として東山の方を見かへる其の橋下にザン

ブと水音、見おろせば鴨河原の流の深み水の淀みへ投網を投げて小鮮を捕るなり、まだ鮎には早からんが此の清き瀬に下り立て網とは面白そうだオヤ彼處には釣て居る者があるユレは堪らぬ是だから云ない事か釣具を持て來ればよかつたぞ我は此にて涎を垂らさぬばかり、五條の橋なら立往生も幾許か縁のないでもないが此で根が生て橋の上へ泊つて行くよと云れては大變だソレ彼處に鴨川踊といふ看板があると柳子に引張られて漸やく橋を渡り越し見れば成程踊の興行場あり都踊の二の町など苟くも君子人たる者が一顧だもすべきものにあらずと今度は柳子を引張て宿へ歸り毒氣抜きに麥酒を命ずれば京阪一躰アサヒ麥酒

が行はるゝとて其を持ち來たる、それにて胸は開けず、柳子は一人心火開けて悦び顔酒肴を命じて景氣よく飲かけ如何です酒で妖魔の氣を追拂ッてはイヤハヤ酒呑が酒も飲ずにツク子ンとして居るところはミヂメなものだ胸を押へて顔を擡めたところ一段の御器量西施が心を病めるときと來て東男の標本になりませうトキニ姉さん鴨川踊は何時から始まると大元氣、予は初午の狸といふものになり、君でも盛んに飲んで呉れなければ愈愈氣が減入て仕舞ふ僕は御免蒙つて横になるからと小搔卷着て寝たる姿を見せ全たくの狸をキメ込むと柳子は得たりと尻尾を出しかけ是も見聞を擴むるの一つだ鴨川踊も見ないものは話に

ならない杯と聞えよがしに獨云ひて女中に其の振合を細々尋ねいよく出かける様子なり、予起き直りて鴨川踊も能うございませうが汽車の妖怪のやうなのが澤山居ませうぜと嚇かせばあげたる腰をまた据えてソイツはかなはないと歎息してついに中止となりけり以て汽車中の妖怪のいかばかり怖しかりしを知るべし、此にて聞くに此頃は宇治から奈良へかけて人の出ること夥多しく京からも大分參じますといふ此「京からも大分參じます」の一語また彼の妖怪を聯想し思はず出る身震ひに夫では奈良へも行れない左様いふ祟りの少なそうな播州巡りとしては如何、イカサマ〜夫は近ごろの名案あどから又名案が出れば

直に其の名案に乗り換へるとして松の名所へ急ぎませうと恰か
も關羽の嚇しに聞怖して百萬騎を率ゐたる曹操が長阪の張飛
の一喝に頭をかへて逃げたるごとき有様にて明れば十五日の
朝萬屋を立て午前の八時ごろ七條停車場へ乗付たり

(十八)

柳塙亭寅彦

此日も亦好天氣なり空高く舞ふ鳶と共に輪を掛て言ふ時は無類
飛初の快晴にて昨日の養老行の如く寒からぬは殊にめでたし、
是は故ある事にして竹翁前途の長きを案じ君が得意の雨合羽を
僕の鞆へ封じ込めば名所巡りの其間決して降られる氣遣ひなし
と合羽を封じて仕舞ひしより天下に一滴の雨も降らず斯る天氣

とはなりしなり此通力のお蔭を以て旅行の都合甚だ能けれど雨
男の予の口よりこれを褒める義理はなし就ては内實感服せし事
など翁に對しては秘すべし、さる程に空の色も青丹よし奈
良の舊都の藤見物をおくらし播州路へ向はんものと七條停車
場へ行き一二等待合室へ這入つて八時二十四分發の神戸行瀛車
を待ちながらチラリと奥の婦人室を見れば天晴大紳士の北の方
と思はるゝ當世風の盛裝美人金指環金時計を光らせ腰元らしき
女を相手に何やら頻に話しながら腕を憑せし卓子の上には花骨
牌多く散かりたり、昔しは京を歌所とて橋板のつぎはぎさへ色
紙短冊と詠みし狂歌もあるに、今は無風流極まりて停車場にも

博奕道具を示し梅に鳴く鶯、雨の柳に飛付く蛙、いづれか手役
 とならざりけると飛んだ方へ外れて行き鬼神を刺繍したる遊人
 をも感じさせ男女の中をも遠ざくるは錢金づくの勝負なりと途
 方もない結果を生じ終には斯んな奥様まで公衆の前を恥ずして
 花骨牌を弄そぶとは淺猿しき事の骨頂なり、尤も奥様らしき女
 にても骸骨の上を粧ふに過ぎず而も其骸骨は大概素性の知れ難
 き馬の骨牛の骨にして唯身形のみ綺羅やかに立派がる譯なれば
 其所業に至つては些と左様も御座らうかと言つて見れば夫迄な
 れど場所柄だけに興を醒し何うして京都といふ所は景色の外何
 一つ感ずるものが無いのであらう鴨川踊も見なかつたのが命拾

であつたかと餘計な愚痴を列べるうち時刻來つて涼車に乗込み
 首尾よく同地を出發せしが一昨日以來乗つたり降りたり随分汽
 車にも飽果たればいつもの洒落も無駄も出ず、予は此地方の山
 山多くは巔きの元げたるを見て、成程片部の土地と違がひ都近
 かき場所だけに早く開けて歲月積れば山の頭も元る譯だと發明
 したるのみにして茨木吹田をも過ぎ大阪の梅田に着く、こゝに
 は阪朝社もあり朋友知己も多ければ素通りも氣が咎めてうしろ
 めたき様なれど未だ名所巡りの濟まぬうち迂濶々々と入込んで
 ベストでも傳染しては取返しのかね話しなり鼠が道を切つた
 やうに怖がり過ぎての無沙汰とは餘まり好誼が無からうと後日

に厭味を言れなば何とか舌の動くに任せてごまかす法もあるべしと大すましにて同所を乗越し程なく西の宮に抵る、彼天磐櫓樟船に乗せられて此どころに流れ寄りし蛭子尊は三年足立ずと聞けど我々はお前の沖の風景に手を拍き下汽車に乗せられながら一時腰を抜して海を褒めたり、又住吉を過ぐる時は社は何處とばかりにて車窓より首を引込まさず兩人ながら煤煙に顔の黒みし躰を見れば古への葦の屋のうなゐおとめも二の足を踏むべし其故事の求女塚もこのあたりと聞くのみにて汽車なれば寄道も出来ず唯進行の疾き事のみ茅渚の丈夫さゝ田男がよつびいて放つ矢をまのあたり見るが如し

(十九)

竹の屋主人

住吉より下りて有馬の温泉にといふ注文を出したれど六甲山の鳴動はげしく湯宿の戸障子など響きに震ふほどなりと出がけ前に見た新聞にあつたからと見も柳子が聞怖にお止となり、向ふがまつといふのだから急げ〜と播州巡りに氣が走り大阪も無汰沙に越して午前十一時前神戸に着く、此の間に智恵と洒落駄の二人男が何を考へ何を發明したかといふに柳子は麻耶六甲と列なる山々の赤瓦なるを見て早く開たので年月つもり頭も兀た譯と悟り予は多く木生薬を塗つたらよからうといふことを考へ桂川を渡るとき「桂川」といふ標札ありしたため乗客皆なそれと

心付きて名所を覺え悦びしを見てアレが天王山だ彼邊が男山だ
 など、當推量に指さしぬやう川には川の名山には山の名の札を
 建て呉れたら長途の旅を慰むるであらうと予が心付けば柳子は
 ズツト隔たつた山には彼のヒーローサンライスの格に山の名を
 現し出したらよからうとの名案を添へたばかり、神戸の一停車
 場前三の宮にて乗客半は下りしを見てナセ神戸まで行ず此
 で多く下りるかど予が不審すると夫は神戸の此が中央ぐらゐるで
 神戸停車場迄行ては行過るからであるど柳子が通説明、夫なら
 此を何で三の宮と云ふか知て居るか是は生田の社に入の支社が
 あつて一の宮は北野村に二の宮は生田村に三の宮は即ち此處に

あるからだぞ教ふれば、是は重寶だ名所圖繪が口をきくとは憎
 い挨拶なり、偕神戸へ着きて直ちに楠公社へ參詣し何時も云ふ
 事であるが今少し俗地をはなれ境内も靜肅ならんには一層感慨
 も深く尊とかるべきに淺草の奥山のなるゆる楠公の精忠迄を薄
 くするやうなり水戸の光圀卿の建し嗚呼忠臣楠氏墓も傍の陰な
 れば物賣店の紛雜にまぎれて能くせずは見ずに過ぐべし先年妻
 子を具して此地をよぎり參詣せし折り予は其の賑かなるに驚き
 て知らず出んどせしを少女が引止め嗚呼忠臣楠氏墓は何れと問
 ひしに始めて心づき何でも此等であつたよと昔覺えの所をたづ
 ねて漸やくに見付たるほどなりき斯く子供すら忠義といへば此

墓を覺ゆるほどの所なれば此社の境内は俗店を取拂ひ神々しく
 肅然とありたきものなり、出て神戸市中をぶらつき名物の牛肉
 に晝の支度も濟ませ、須磨明石が這ひわたる程ならば此は跨ぎ
 越すともいふべきほど近き兵庫へまた態々汽車に乗りて行く、
 此の汽車にてまた初日二日とも乗り合せし病客と付添人に逢ふ
 是は不思議また同じ汽車の同じ室に乗合せました、如何です昨
 日米原からの妖怪は無お困りでしたらう、實に如何も、と苦笑
 ひ、此の室にはまだ外に柳子が紅がりし初日の美人も一人あり
 他の一人も昨日同室の見知人なるも不思議の出合といふべきな
 り、斯く離れては又合ふものなれば旅の耻は搔棄杯の無分別は

せず座を譲り合ひ事あらば扶け合ひ禮儀立つほどはなくとも無
 嫌なきやう心がけたきものなり、旅は種々悦びも悲みも乗せて
 走る中には我等の如き伸氣もあり、今朝京都停車場の待合にて
 見し男女七人連の遊女屋らしき江戸者の云ふを聞けば穴守様は
 參る伏見の御稻荷様は拜む返りに豊橋から乗り替へて豊川様へ
 お參りをすれば是でモウ世の中に願はない土地を悪く云ふンぢ
 やアないが伏見の御稻荷様の立派はドウダ觀音様だツて迎もか
 なはないと有難がる斯る信心參りもあるなりけり

(二十)

柳 塙 亭 寅 彦

伸氣極まる我々にも流石に用事がありし爲め神戸よりは跨ぐほ

となる兵庫まで汽車に乗りしは楠公に對しても氣の毒なほど智
 恵がなく嗚呼兩人何等馬鹿と碑が立つかも知れぬと愾ひ不案内
 な町を行き悪車夫の喰物になるよりは此方遙かに安心なるべ
 し、下車して所要を辨せし序に此停車場の驛長重田幸造氏にも
 對面し播州巡りの都合など聞合せたるに心切なる驛長の事とて
 我々を驛長室へ招き入れ懇ろに教へらるゝやう程なく下汽車が
 參るゆゑ今日は舞子までお出になり緩々と御一泊の上松なども
 御覽になり明日は明石を御見物になつて土山驛まで御乗車が宜
 しい尾上高砂の松巡りから石の寶殿等を見るには加古川驛から
 降りて阿彌陀驛へ廻るのが道順の様に言いますが却て土山下車

の方が勝手が能いかと思ひます又重ねて御乗車の時は強ち阿彌
 陀驛へ參らずとも新設の停車場に寶殿といふのが出来まして昨
 日から汽車が発着しますから御都合次第になさるが宜しい責任
 は帯びられません人が著した山陽鐵道の案内記がありま
 すゆゑ御參考までに呈しませうと何處までも届いたものなり、
 我々はやたらに禮を述べ舞子の旅館中有名なるは龜屋といふ事
 をも確かめ午後二時二十分の汽車にて舞子へ向ひぬ、最初の考
 へにては例の草履にて須磨の浦を歩き若木の櫻の下に行きては
 一枝を伐らぬゆゑ一指を咬へハ、ア是かと眺める位で天永紅
 葉の例に任せられぬを僥倖の事と思ひ敦盛蕎麥を味つては一門

屋島へ引越しの昔しを偲んで細く長からぬ榮華を悲しみ又紫女
 がすさびの須磨の巻に「うち願み給へるに來し方の山は霞はる
 かにて誠に三千里の外に心地するに楫の車堪へがたし」とある
 を思合せては「ながむる空は同じ雲井か」と打啣ちしとは事變
 り數百哩遠行の人も遊山なれば面白く同じ雲井の上天氣に氣散
 じなるを嬉しがり又鐵拐が峯鷓越を仰いでは例の判官最負とな
 り源氏物語の光る源氏と平家物語の勝る源氏が頭腦の中にてゴ
 ツチャになり何が何やら分らぬまでに大いに感心する積りなり
 しが無子へ直行する事となりしかば左しもの名所も汽車の中よ
 りチラ／＼と見るやうになれり、チラチラと見し所に依れば浦

の筈屋の須磨籬あはれに淋しき躰は少しもなく氣障な構への別
 荘のみ何軒となく建ついき家と家との間より折々海の見ゆるが
 如きは大俗も亦極まれりといふべし、わくらはに問ふ人あらば
 と詠みし行平の中納言が藻汐垂れつゝ浦づたひして歩きしとい
 ふ佗びたる土地も變りに變り肺病患者出養生の本場となればお
 ちかへり鳴く千鳥よりもパチルスがちりやちり／＼迂濶に空氣
 も吸はれぬのみか「わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に痰を吐
 きつゝ病むと答へよ」と呻くべき人物が三々五々杖に絶て浪打
 際をうろつき居るとは愈々益々恐るべきなり、左れば危邦に入
 りといふ古語の通り斯んな所へは寄らずしてサツサと汽車にて

駈拔る方が伶俐の様に思はるれど名所舊蹟の事を考ふれば素通りするも如何はしく憾みなきにも非ざりき、是より舞子までには鹽屋垂水といふ二箇所の停車場あり明石はまた其先なれば這ひ渡るには骨が折れるべく蝸牛の角ふりわくるには力一ぱい伸して見ても確かな見當は附かざるべし

(廿一)

竹の屋主人

角ふりわけよ須磨明石と云ひし其蝸牛の角の上の争ひ源平の古戦場も見たけれと須磨は肺病患者で一杯と聞たばかりに怖氣立ち千鳥の羽音に驚きて西をさしてぞ落ち玉ふ平家の公達となり汽車にて走りながら建つべく別荘を見て是では芭蕉も「見渡せ

ば眺むれば見れば須磨の悪」と秋といふ字を書きかへるならん須磨鹽屋と過ぎ垂水驛は早や播磨の國なり、此に到りて柳子膝を打ちて悔んで曰く須磨の名所のうち村雨松風の墓へはたどひ肺病に取つかれるまでも是非詣るであつた昔は行平朝臣一人で二人の海士を寵愛し玉ふが今の世二婦は用へないから美人が二人あつたときには金か歩かど投げて見て一人に極めなければならぬ幸ひ此方は行平業平と兄弟揃つて居るから松風村雨の二人も恨ツこなし鬪取で相方が極る譯だ其の時向ふで貴方方先約がございませうと念を押せば即座に「白波の寄する渚に一夜寐る旅の身なれば妻は定めず」とやらうものをと飛でもない了簡、

予も須磨の通り越しは心ならず外は格別清盛の墓だけは参詣し
 たかつた傳へ聞く清盛は狐福といふものを得て一代榮花に誇り
 たりと予は狐福杯といふ氣味の悪い福は欲しくないが狸福とか
 貉福とかいふやうな雅の有る福が授かりたいからよく拜んで見
 やうもの、イヤ是は怪しからん欲心貉福より僕は艶福の方だと
 柳子の熱心さしてゆく舞子といふもそれに因あるに此邊に遊女
 塚とて其頃の有志家ともいふべき者が江口の君の爲に塚を築き
 其上に寶篋印塔を建たりといふ或はまた大阪の遊女が下の關へ
 行かんとせし道に死して此に埋めしなりともいふいづれも女に
 隨喜者の多きは昔も今もかはらずと感心するうち午後二時半青

松白砂の本場なる舞子へこそは着にけり、停車場を出れば振面
 白き古松列なりて公園のうちを歩むごとく真向ふの海際には大
 厦高樓巍然たり昔の繪で覺えた海道茶屋らしきなければ其畔
 の何某殿の例の御別邸かと恐入り千鳥にまがふ椋鳥のやどり何
 處と疑ひながら村雨がりの美人を見つけ龜屋は何處と聞けば
 此が其でございませと是は龜屋の女中なり、ナンの事だ見れば
 門が龜甲に塗つてある何屋とも何樓とも記してなくとも停車場
 の突當りは龜屋と人は知るならん玄關の衝立に猩々が繪いて有
 るも龜はよく酒を飲むよりの趣向ならん我々も此でこそ一番本
 藝に取掛らうよと入口から氣に入て二階へ通れば引き明ける障

子と共に淡路は眼前に現はれてまことに呼べば應ふるほど絶景々々と灘をからし望遠鏡を取り出して海の景色に餘念なし、見下す濱邊に馬三疋立ち其の下に人間四五人ゴロ／＼と臥ておたかも馬は此晝寐の人を立番するやうなり此家の表は山陽道の本道なるにソコを行かずに濱の砂路に馬をやるどは此の馬士たちも一句一首やるほどの風流人かと思ふうち我々が樓上に立顯れしを見てか臥たる者は起き立てやがて銘々馬引寄せヒラリとばかり打乗りて汀を西へ驅けさせしがまた東へ取てかへし馬の足の波に浸るほどのところを乗り廻す有様は源平合戦の其の昔を今真似びて見するに似たり折しも夕日の海の面に輝くさま若し

は源平の兵士等修羅道の苦みになほ責められ斯く我々の前に現に現はれ後の世とひてたび玉へ跡用ふてたび玉へと太鼓地の後シテとなる譯かといふかりて女中に問へば彼は借馬で一時間五十錢づゝで御客様方が御運動なされまますといふに聊か安堵たり

(廿二)

柳塙亭寅彦

太鼓地の後シテとなる代物にはあらず只の借馬と聞いて見れば一鞍責めたき心地もすれど馬術といふもの子供の折に試みしのみにて甚だ覺束なし而も其馬は一人の友達が前に立ち一人の友立が其帯につかまり脊中を圓くしたる逸物にて悪太郎栗毛とい

ふ名馬なれば手拭の手綱捌き如何程覺えがわるにもせよ今の用には立ざるべし、併し自分は乗らぬまでも濱邊に馬の嘶くは中々景物になるものだ。予は又ハ寫生帖を取出し素人藝の繪の具三味不思議に汚れて新派の彩色めくところは無聲の新體詩とも謂ふべく塗れや塗れ寫生帖破る心で塗るべしとベタくと遣つて除けしは我身ながら腹筋なり、此間にも海の景色さま／＼に趣きを改め人目を娛ましむること一方ならず島は一つの淡路島濱は同じ舞子ながら以前の馬は影なく去つて右左りより漁船あらはれ櫓拍子揃へて勇ましく浪打際を漕出すかと見れば忽ち腰篋したる多くの男女がむら／＼と駈來りヨンヤサ／＼と聲を合

せて地曳網の綱を手繰り暫く樓前にて働くはわざ／＼客の所望に依つて網を曳くのではあるまいかと疑はるるまで興味あり、此漁師等が濱傳に追々東の方へ行きて一時淋しくなるかと思へば夕づく日を斜めに受けて片影紅き白帆の數は見／＼うち増り行き何處の磯へ歸るか知らねど孰れも同じ楫を取り秋の初雁の行の如く引續いて走るさま取分て面白く柳子筆捨の浦と命名したい程なれど予が筆を捨てたところで何のヘンテツもなくモシ／＼何か落ましたよと下座敷に居る客が教へて呉れる位ゐにて誰も感心する人はなく名所圖會の本文に加はる事はむづかしかるべし、此時注文の酒下物眼の前にならびたれば禁酒の竹

翁も咽喉を鳴らし此景に對しては飲まぬといふ譯には行かぬと盛んに献酬を始めながら實に好い眺めだが昔しの繪で覺えた海道茶屋のないに連れて帆影も思つたよりは少ないではないか本筋なら隙間もない程ゴチャゴチャにある筈だと少々許り不審の躰はいつも高輪には西瓜の皮が散らかり傍に大八車があるものと極めて居るやうな論法なり、イヤ僕は子供の頃幾度も瀬戸内を航海したが海一面の白帆といふのは多く朝景色に見た様ですから未だく先が楽しみですと飲む程に、ける程に大愉快となつて腹鼓を打つは既に狸福を授かつたやうなものにて清盛の墓を拜まざるを強ちに悔むに及ばず、予は又艶福を得ねど龜屋一に

歌女屋と書く由なれば多福だけは得たるに似て兩人ながら福々しく斯んな名所にて悦に入るを東京の友人に見せたと頻りに嬉しくなるに付け濱邊より松林を暮れぬ間にぶらつかうと大槪に酒を切上げ麻裏草履を突かけて裏手の濱に立出れば風景いよく妙なれども龜屋左海屋の軒並に別荘多く又其爲の敷地と見えいまだ家は建ねども浪除として築きし石垣遠くつらなりたる躰を見てはタチくせざるを得ず、若し海よりこれを見なば石垣の上の方に大厦もあり松もあり宛然たる城廓の如く平家再び世にあらはれ此處に楯籠りし様に思はるゝならん但し上臈の管絃も今めいた西洋音楽二階の欄干に憑れながら異力な音

聲を出すは公達方も開化せられたと怪しむ程の次第にて家のつくりも住むべき人もいづれ氣障ならぬものはなく大いに風致を損したり

(廿三)

竹の屋主人

風景の地へ別荘を建てる者を柳子が凡俗がること大伴の旅人卿が下戸を捉へたごとくにて眼障りだ取毀てと御下知もあるべきやうなり、予はずでに諸處方々別荘地を見立てたること百四五十個所、なれども柳子の御思召を憚りいまだ一ヶ所も建築に及ばず、せめては凡俗がられぬところへ目に立ぬやう八疊敷ばかりの座敷をまつらへんものと儲こそ狸福を願ひしなれ、それも腹

鼓に福を打ちとなり鼓は元より波の音の濱邊傳ひに嘯けば松に吹く風琴を調べ青衣の天人袖を翻して實にも舞子の濱の景色面白やと異に節を付けて松林の中を逍遙するうち日は暮果て往來の人なく踏めば音ある白砂の白きに覆ふ松の枝、蒼々として鵬の翼を伸べたるごとく樹根は龍の鱗なして蟠りまた伏すに似たり樹ごと趣きを異にし振をかへ皆二抱へ三抱へあり丈低くして枝さし長く風受よきにや梢の高さ一様なり、斯る景地斯る静さいかさま松の精にても出るやと松根によつて腰を据ゑ出來合の仙人二人しばらく息を長くせり、海士の漁火それならぬ俗別荘のランアの光り千鳥は鳴かで汽笛の響き停車場の五分鈴今乗る

身にはあらねども氣忙しさを振り動かされ仙人の店をソコ／＼
 に疊み表の方より宿へ歸りまた杯中の物と親しむ、日は没果て
 月はまだ出ず海の面白く光りて淡路島山黒き果に岩屋の燈明臺
 豆のごとくに輝き夜景また妙なり、此の暗きにも地曳網または
 じまりエイサクの聲おびたしく黒きもの西東と濱を走る其
 うちに一際高く「箴鴛持て來ウ東濱の甚太」と聞えしは海士の囀
 りいとをかしく洋燈に向ツて差合なれど予ながら光る源氏の再
 生かと思を撫るに此時柳子も同じく腮を撫られしがこれも源氏
 の君がツて居るものならん、是で今に淡路の島蔭から月が上る
 と來ればお誂へだかと云へば淡路は南にあたるので月も日も出

も入りもしません月は丁度此邊からと美しき女童（是は少し實
 地と齟齬すれど君がり兩人光を争ふ此の場合に女の婆ではうつ
 り悪ければなり）後の方を指さす、ハテナ月落ちかゝる淡路島
 山など歌にありさうだが夫は住吉か堺あたりで詠むのか然し今
 夜だけ南から月が出るもまた異だらうと方角も無く興に入る

(廿四)

柳 塙 亭 寅 彦

芝居の月は都合次第いづれの方角にもブラリと下れど眞物は不
 自由にて淡路島の蔭から出ぬは白壁の微瑕ともいふべしだ左様
 言へば先刻の馬も後脚が前へ折れぬは矢張芝居氣に乏しかつた
 と無理な事を難ずる程に月は女童の指示したる後の間邊より昇

りけん海の面白く光りて黄昏の景とは變りてほの暗かりし隅々も自から明くなり又一段の風情を添へたり、めぐり逢はん月の都は道遙かに隔れども見る程ぞ暫しなぐさむどはさすらへたる人の上なれど兩人互ひに光りを放ち本家の源氏の向ふを張る事豆の如き岩屋燈明臺の火が月に對するに異らず及ばぬまでもと氣を入れる譯なれば此月夜を悲しがり何うも景色の好いだけに物哀れになつて來る様だと謫居がること大方ならず、既に竹翁は少々事實の齟齬するにも拘らず女の婆を女童につくりかへ釣合を取りし程の仕誼なれば其餘は推して知るべきなり猶一つ記し置くべきは此際爆詰の養老の水を取出し女の婆に吞ませなば

忽ちにして若返り眞の女童と變ずる筈だが其智慧は出さたりしかど批難せらるべき一事なり如何にも夫は名案なれども彼妖怪に惱されし時肝腎の養老の水は服藥の爲に用ひ盡し京都以來一滴をも餘さぬゆゑ此場の用には立ざりしものと知るべし、斯くて兩人は酒を切上げ臥床の中へ潜り込みしが女中等各手に雨戸を繰出し裏表の締りをなせば松風も楫の音も聞えず只の世界となると共に間毎々々の京阪訛り殊の外騒がしくて翁は碌々夢も結ばず予は旅疲れにグツスリと寝込んで翌十六日の朝まで高軒をかきつゝけたり、眼覺めてムツクと起るや否や欄干より海を見れば風渡りたる八重の潮路は眞帆片帆にうづめられ其數幾百

千ども測り知られず近きものは水主楫取の煙草を吸ふ姿も見え
 少し遠きものは人の影黒く蠢めき程遙かに隔りしものは白帆の
 み能く見えて船の形は定かならず沖はいよいよ累なり合ひて白
 壁の塀を築きしが如く朝日影に見る眼まばゆし、サア／＼畫面
 の通りの景色が現れました素敵だから御覽なさいと忙はしく竹
 翁を招けばドレ／＼と出来つて奇絶々々頗る妙だ吾輩實に斯ん
 な眺めは臍の緒切つて初めてだよと現を抜かして喜ばれたり、
 去れど此船の内に明石入道の迎ひらしきものは見えぬ帆を白壁
 に見立たればへまムシ入道の縁はありとも夫は今源氏兩人を乗
 せて明石の浦へ送るべき人物に非ず又神業の怪しき風ほそう吹

くべき様子もなければ鐵の線路の細う敷きたる汽車に乗つて行
 くに限ると指す方の相談をもそこ／＼に取極め置き此絶景に對
 しながら朝餐の膳の箸を把りしに樓前の濱邊には又もや地曳網
 始まれり、現に魚を取るところを見物しつゝ魚を喰へば皿の中
 の代物も潑刺跳て居るかと思はれ舌鼓をうつて美味がるうち時
 刻は八時に近づきぬ、同七分には汽車が出るゆゑ急いで明石へ
 行かざれば其先の松巡りが今日中には出来まいとたらだら急に
 支度をとゝのへ舞子の濱を出立す、是より明石停車場までの間
 に休天神とて菅公筑紫へ下らるゝ時驛の長に詩句を取らせし舊
 跡ありと聞けど車内よりは何處とも知られず其詩に「驛長莫

驚時變改おどろきときのかへりかへ」云々いふいふとあり寔に時の變改かへりかへにて今は山陽鐵道が通じ
 旅客の昇降のぼりくだりおびたいしきに驛長も驚くなかれと意味を轉じて汽
 車に持込み妙な工合かまひに解釋して獨り心に喜ぶなど神に對して勿
 体なまじなく

(廿五)

竹の屋主人

朝風や帆ほにかくれたる淡路島と名所めいしよには季きなしの先例せんれいをかつぎ
 出したいほどの海の景色けしきまかも霧きりもなければ靄もやもなく晴れ渡り
 て海原うなばらが只帆たよりほだらけにて波なみも見えぬばかり幾百千いくひゃくせんとなき此の帆
 の數柳子かむりうしが詩しを引ひかれし天神てんじん様の向ふにまはる時平しへいの大臣おとぎいた
 く笑癖せうへきをはしたりと聞きぞ斯かう帆ほが並ならんでは袍ほろの袖そでにて口くちを掩おほひ

ホ、ホ、ホ、ホ、ホと長笑ながわらひでも七笑ななわらひでも算かぞへて數かぞに足たらぬ
 なるべし是これに依よりて熟つらくこもへば古いにしへしへ源平船軍げんぺいせんぐんに平家方へいけがたが負まけし
 も道理ことわりなりけり源氏は白旗平家しろはたへいけは赤旗朝ムツクリ平家方へいけがたが眼めを
 さまして見みると漁船いよせんも商船しょうせんも海中うみなかが源氏げんじと見え是これは堪たまらぬと逃に
 げる我舟わがふねさへ疱瘡神ほうそうがみを送おくるならぬばマサカ赤帆あかほでもなく矢張やっはり白
 帆はを張はれば赤旗あかはたは少すこしも引立ひきたつひに其旗そのはたを捲まくには至いたりしなる
 べし左ひだりれば能登殿ののとのが弱よわきにあらず義經よしのりが強つよきにあらず必竟ひつぎやう旗はたの
 色いろの白しろが勝かちしものしと知しられたり、併ひかし中なかには見みぼらしく蕙帆けいほも
 交まじれは彼あれには佐野源左衛門さのげんざゑもんが便船びんせんして居ゐるならん杯なごと戯たはむれ此浦このうら
 の景色けしき見捨みすてがたければ駕かこかりて淡路あはぢに乗のりん汐干狩しほひかりといふをモチ

リ傳かりて明石に越さんと名案を提出せしが例の女婆に聞と舞
 子には人力車なし垂水へ呼にやりませうかどの事にそれ物む
 づかし明石の入道よりも迎が來ぬときまれば八時七分發の凜車
 に乗りしが今の兩人源氏は昔と違ひ海の荒もなく至極の好天氣
 れいの風といふものも出で來ず雨は勿論田舎源氏に出る山伏鬼
 得院がヒロチャクしそな合羽を封じ込めれば降らず只「どぶ
 やうにあかしのつき玉ひぬ」だけが本文にかなひたり、着くと
 其まゝ停車場前の茶店へ荷物をあづけ人丸神社への道を聞て出
 づ、町のはじめ五六軒のところに人丸神社道の石あり左りへ曲
 り突きあたりて一廻はりすれば一間ばかりの小川に「人丸橋」と

いふが架れり農家チラホラの小道を行きて西口の登きはに龜の
 井といふ清水あり此からそろ／＼是で手水をつかふから龜齡水
 だなどゝのコヂツタ麗々しく掲げてあり石段を登りて寺ありこ
 れを月照寺といふ例の物に心得たる我輩も、是れが人丸の祠か
 成程明石の浦は手に取るやうに見える。と茶店に憩ひて眺望をほ
 しひまゝにせしが矢鱈に勸める寶物拜見などの阿房はせず元よ
 り此祠は彼「ほの／＼どあかしの浦の朝霧に島隠ゆく船をしぞ
 思ふ」と云人丸の詠歌によりて社を建しのみ其歌も人丸が此處
 から眺望して詠だでもなければ人丸が住し地にもあらず塚は石
 見の高角山にあれば此は只歌の徳を慕て祭しものなり我等歌聖

のあとを慕ふどはなけれど兎角鼻本の人真似にて時々出たらめ
 を吐の縁によりて参詣せしのみ、此寺より安産の御守火防の御
 守を出すよし、ナンデ人丸が産や火事に關係があるかと聞ば人
 丸は即ち人生るゝ火事の方は「火止る」なりとて歌まで捧へ附
 たり「我家のかきのもどまで焼來とも一聲たのめ其處でひとま
 る」随分コヂツケたりといふべし、トコロが此は寺だけにて肝
 腎の人丸神社は此の横手に別にありすでの事に石清水へ參るつ
 もりで極樂寺高良明神ばかりを拜みてかへりし仁和寺の法師の
 譏をうけんせしに柳子心づきて見出したるは眞に歌心あるも
 のは神徳忽ち通ずと見えたり

(廿六)

柳塙亭寅彦

山までは見ずといひし仁和寺の法師の獨合點少しの事にも先達
 はあらまほしと兼好も言はれたり、強ち先達ならずとも友達あ
 れば其跡追をも遣らず竹翁の拜みしは月照寺にて人丸神社は其
 隣にある事を心付き更に参詣の時直しをなせしが是は予に歌心
 ありて神徳の通じたるにや但は駄洒落心の深きが爲め例の「火
 止る」の縁により自然と胸にこたへたるにや其處は一つの疑問
 にて原因未だ取調中とは新聞雜報の出火の記事に似て益々火防
 の御守に關係を強くしたり、豫て噂に聞及びし社前の盲杖櫻
 をも一見したるが此櫻は筑紫の盲人此に來つて祈願を籠め「ほ

のくど誠わかしの神ならば我にも見せよ人丸の塚」と詠みたるに不思議や兩眼明かになりしゆゑ携ふる所の杖を地上に挿して歸りたるに其杖忽ち枝葉を生じ終には花をも着けしなりと神社佛閣にはお定まりの同者歎しの靈驗話し、若し我々も境内に永らく立つて居るならば果は足より根が生えて盲杖櫻の傍らに獨活の大木森々と茂るまいものでも無しと下向の途に就かんとせしが歌聖の社に詣でながら狂歌一首もなきは残念なり、來る道々にて半分だけ考へ置きし孕句の孕むといへば人生るゝ人丸の加護もあらんとさまゝに工夫を凝し「救ひ玉へ我も歌道のめくらぞと恥をあかしの神の廣前」と異なるものを産み出した

り至極の難産なりしかど何うやら斯うやらコヂツクしは全く産の守をも出す神の御蔭に相違なからん、神徳は唯是のみに止まらず人の丈より少しく高き盲杖櫻に咲く花は上野向島一鉢の花よりも多しと見え此地の名物として賣捌く件の櫻の鹽漬は境内の茶店に列び市中の家々にも看板を掛け此處彼處にて鬻ぐのみか停車場の商人も盛んに賣るを見受たり左まで花を着けまゝと思へど諸事萬事神業なれば一概には斥し難し、兩人は是より明石の城趾を見物し龍王の松岩屋神社へも廻らんものと元來し方へ返らんとせしに端なく傍への板塀に明石城、谷の觀音、妙見神社近道といふ揭示のあるを見附出し左らば此方を辿らう

と石高の細徑へ入りしに下り坂、峻しき事恰も屏風を立たるが如く是はくど驚く間に足は自づと前に運ぶ人丸山の逆落し、エ、源氏は源氏でも明石の上の岡邊の館へ出掛ける方の玉だから逆落しは源氏違ひだ人が違ふくど眩いて見ても更に止まらず宛ら背後よりドンくど突落されるものゝ如く遙かの谷間へ下り行けば谷の觀音妙見神社隣合せに庇を交へ樹木四邊に繁茂して物靜かに能き所なり、斯様な神佛は最初より拜む積りはなかりしが目前に出られて見れば素通りも如何なりと妙見の境内へ入り一廻りして社前に出でしが此處の道筋は蜘蛛手の如くいづれへ行きて然るべきか毫しばかりも方角が立す、餘り人丸神

社を冷かしたれば神罰觀面に報い來て目明が却て盲目になり盲杖即ち盲の杖に離れたやうな困難を嘗めさせらるゝに非ずやと心細くなりたる處へ荷を擔ぎし里人の息喘と來懸りたればモシくと呼止め城へ行くべき道を問ひしに是より山の上へ行くど小い宮あり其小い宮の脇より西へくど出なされと言ひすてゝ急ぎ行く或ひは此里人土地神の化身にて晴天大聖の迷ふを知り道を教しものかも知れず

(廿七)

竹の屋主入

をしへられし小い宮へ廻りつき喘ぎを休め方角を見定め是より人氣なき山道にかゝる、雜草生茂り道も見どめがたきほどなる

を蝙蝠傘に押し分けて行くこと五六丁ばかり右手に大池あり水草に埋まりて水の色もよく見えぬといかにも深さうにて物凄しこれは城の内堀ならんか古き松に藤のからみ上りて花をつけたる昔の春の色を殘して荒たる今を恨むがごとし、此池には屹度主が居ます子、主どころか蛇が多く住んであたかも盤臺へ海鼠を並べたる如くでせう斯く立止まつて居ると何となく陰々たる氣が肌を襲ふやうだ昔此池へ嫉をうけたお妾とか召仕とか身を投げて夜なく怪しい火が燃え上つたなどいふ傳説が必らず有るでせう播州と來ると皿屋敷の本場だけ怪談も多いか何にしろコウ深々とした山の中へ迷ひ込では少し心細いが、イヤ城趾

には城の繩張の法が有るから僕が其の地の理に依てチャンと行く道を定めると、城通といふものにて尙ほ森深く分け入ると果して内郭ともおぼしき廣場に出づ、老杉蒼鬱といふほかに山楠の三抱へ四抱へなるが空を掩ふて樹下は濕りたり梟は鳴かねども二人の話し聲さへ袂に響きていと寂し、此の明石の城は元和三年小笠原右近將監忠真が始めて築き領したるところ後寛永九年十一月忠真は十萬石より増して十五萬石となりて豊前の小倉に移り、後松平兵部大輔こゝを領したるなり、小笠原忠真は家康公の外曾孫にてことに愛せられたるうへ大阪の戦ひに十八歳にして功名あり且つ兄の家の事について義心の事ありければ其

志しを賞してあらたに此地に十萬石を賜ひしにて城普請も徳川家より多く助勢ありしなれば分を超て立派なりしといふ其城も世の換るにつれ斯く寂寞の無人境となりしかと鳥の音もなく幽なる林を出れば巍然として三層の天守閣あり、主なき家の荒れゆきて柱傾むき簷落ちて葺の宿となるに同じく、此の城樓も守る人住む人あざれば頽れ殘はれるにまかせ粉壁崩れ白堊落ち蘿蔓まどひからみておづかに傾斜を支ふるに似たり望遠鏡にて見れば挾間の破れたるに大きな蜘蛛巣くひたる此圍を破りて半面老女の檜扇をかざしてあらはれもすべく思はる、此を去りて西に廻ればまた一閣ありそれを廻りてまた一櫓いづれも壁

落ち閣上に草生茂り狐兔の棲所となれり、此に到ると二人とも武者修行となりざるを得ず立止りてキツト見上げ十二單衣の妖怪が出そうなものと睨みても其中へ入りかね傍近くも今や崩れ倒るゝかと怖ろしきに近寄らず石垣の上の平なるところに草を折敷きて坐し兩人眞面目に榮枯盛衰の道理を歎ず、是より北に向ひ西に取りて阪道あり阪にかゝりての櫓ごとに古色を帯び蘿蔓のほか藤もまどひつきそれに薄紫の花をつけたるは一層凄愴のおもひあり、柳子是はのがせぬと例の寫生帖を取り出しコレでは如何か行先の姫路城と間違つたやうだ此の景色を早く菊五郎に見せたら刑部姫の大道具にいろく好みが有つたらう

實にコンナ趣きのある妙景に出合ふとは思はなかつた此の明石の古城は勘定外の儲けものだ是では岡邊の松から明石入道の塚あたりへ行たらドンナ掘出し物があらうも知れぬと、人九神社の前に生ゆべき獨活の大木こゝに根づきぬ

(廿八)

柳塙亭寅彦

刑部姫の大道具には参考となるべき空城ながら我我は唯頼れし櫓の外面を仰ぎ見て凄い〜と恐るゝのみにて閣上の荒れたるさまを實見などは思ひも寄らず、好奇心の強い西洋人なら蝙蝠を逐ひ蔓草を拂ひ屹度登るに違ひないが十二單衣の妖怪も碧眼赤髯の人を見ては果して何方が化物だか譯の分らぬ事になり

周章て古御簾の裡へ逃込むなるべし、西洋人といへば此景色は日本畫に書くよりも寧ろ油畫の好畫題だ何時も展覽會へ行つて見れば海邊や村落の夕映ばかりで鼻を衝く始末だが些とは斯ういふ圖柄をも紫仕立に仕立上げて眼先を變たが能からうと思にもつかぬ事を言ひつゝ彼の繩張の法を心得たる城通の竹翁に従ひ木立の中を分け行くに折れたる樹木横はり散布く松葉堆かし、斯く地の理に詳しきを見れば竹翁忍びの術を心得二三度も此城中へ忍んだ覺へがありはせぬか其時敵に見咎められ鼠になつて逃せば本讀みの通りなれど晴天大聖と名乗る以上は猿になるより外はなしとさまざま思續くれば半面老女の妖怪を恐る

事が腑に落ず妖怪と聞けば片端より退治つくる筈なるに偏へ
 にシク／＼せらるゝは芭蕉扇に懲りたる身ゆゑ檜扇にも肝を冷
 し若し此處より東京まで一扇ぎに飛ばされては詰らぬものにな
 るであらうと深く心配せらるゝにや兎にも角にも疑はし、斯く
 ても尙通力自在と自負する程の猿ならば猿にして置け呼子鳥お
 ぼつかなくも道を迎れば城通の先導實に不思議にて妙な方へも
 迷ひ込まず大手の跡かと思はるゝ、柵形へ立出たり、此處も僅か
 に石垣を存するのみにて草藪々たる哀れさは涙ぐまるゝばかり
 に見へ彼封建の代の昔し麻上下に突袖したる甲之進殿、乙藤太
 殿を始め諸士の面々には市川團八、同苗升六、尾上梅助、中村

翫太郎杯と聞えたる一家中の者共が威儀堂々と登城せし其面影
 は更に残らず只今たゞ鷓鴣の飛ぶのみ有りど唐人の吟じたる嘸
 語をも思合せて兩人互ひに太息を吐き中老お小姓花の如く春殿
 に満ちたるも今は僅かに椋鳥二羽ボンヤリと佇立んで古へを懐
 ふとは變れば變る世の中だと又しても榮枯の道理を感じながら
 農學校の傍らを過ぎ麥秀でたる間より櫓の方を見返つて愈々益
 々氣を滅入らせ濠に添ふて町へ出れば忽ち人通り賑かになりて
 恰も世界の違ひたるが如く今までの物凄さは夢ではないかと思
 ふ程なり、サア今度は龍王の松といふのを尋ねやうと來合せた
 る人に向ひ其道を問ひたるに怪訝な顔にて我々を目成りそんな

松があるやら無いやら聞いた事もないと答へぬ、イヤ明石に有る筈です其松はたいしたもので寺の庭一杯に枝を擴げて居ると云ふから三歳見でも聞知る程の名木だと思ふのに御存知ないとは思議だと思議がるを不思議がつて其人は同伴の者にも試みに問合せたれど皆一樣に知らぬと言へり、昔し實方の中將が阿古屋の松を尋ねわびしは陸奥の話なるが我々兩人は棕鳥主義に掛けて二方の大將ゆゑ播磨路に龍王の松を求めかぬるも何うやら縁故がありそうなり、但し實方の方の松の名は五條坂の遊君らしく阿古屋など呼べばこそ知らぬとばかりでツイぼんと言ふて除けぬ理屈も立てど二方の尋ぬる松にそんな筈はある

べからずと不審更に晴れ難し

(廿九)

竹の屋主人

松は知らないくと路上の人に云はるゝ無念さ龍王寺の龍燈の松でも龍燈寺の龍王の松でも何方でも能いから大きな松は有ませんかと少し事の分りそうな人物を見ると諄く聞いて廻るうち廣くもあらぬ明石市中とてやがて自然に其寺近くなりて尋ね當たり寺の名は龍王山長林寺境内一杯に枝葉茂りしは龍燈の松といふ訪ふて甲斐ある木振なり、此寺を出て直に岩屋の神社あり參詣して濱に出て見るに淡路はまことに近く此の祭禮には神躰を舟に乗せて淡路の岩屋まで泳ぎつれて參りまた泳ぎながら舟

を押して歸るといふイカサマ此地の漁夫には泳ぎ越しもなるべしと思ふほど近し極めて近きところは十八町ほどなりといふ、是より明石の上の岡部の館岡部の松入道の碑など見廻るべく來合す人に問ひたれど是もまた一向に通せず東海道で彌次喜多の泊つた宿を尋ねて嬉しがる我々も暑にホツとして市中を見物ながら停車場へと取て返す、舊八萬石の城下ほどありて市中賑はひほのぼの樓などいふ散財所も見えたり、町の中に忠度町といふありて薩摩の守忠度の塚ありまた腕塚もありといふ、左れど汽車の時間迫りたればたづね入るべくもなく忙はしき鈴の音に驚ろかされ駈足にて荷をあづけし茶屋へ飛び込み鍋き合せより

は今一段急にピンセット合せともいふべき慌て方にて飛び乗りしは一の谷を落されしときの平家の葉武者外ならず棕鳥方にては聞ゆる二方の大將も此の時の武者振は夾かならず見えたりけり、此の明石海岸には海水浴場ありて其處は例の青松白砂的にて風景ことによしといふ一夜あかしと極り文句の續けがら泊りてゆるく見物すべきところか、實景のよきのみならず人丸忠度の古跡のほか源氏の君のさすらひ明石の上のおもかげなど思ひ巡らす附加景あり（實地の景色のほか古歌古跡等にて何となく床しき心のまさることを「附加景」と稱する事に兩人にて一定せり）おまけに古城といふ掘出しあり一遊のあたひ確にある地

なり、此地の人なりし昔儒梁田蛭巖が友人におくりし書に「海嶽の名勝最も奇絶とす門を出づる僅に數百歩巨浸萬頃淡路島は前に在り山勢透邈として紫綠染むるが如く摩耶鐵拐の諸巒雲霞吸ふ可し此以て俗慮を祛り凡骨を換ふるに足る」と此地に永住して村夫子に終るを樂みしも強ち住めば都の土地自慢のみにはあらず、左れど我々此地の景に戀々して永滯留でもなすならば摩耶鐵拐の霞やら淡路の迫門の海氣やらを呼吸し俗慮がなくなつたり凡骨が換つたりしては當人がフイになるやうなものなれば左るむづかしき土地に長居せず凡俗を折角と保存せしは是もまた仕合せの事なり、熟くおもへば此邊の地名など皆取合せあ

るやうなり舞子のどなりに遊女塚あれば大藏谷の次に明石あり赤石海中にありて郡名の明石も夫によりて起ると云へば其傍には黒石を祭りし黒石明神あり忠度塚あれば源氏の君を迎へし岡部の館も縁あり妙といふべし何でも妙だと午前十一時の汽車にして是も對よき假寂の岡に近しといふ手枕の松へと志ざす

柳塙亭寅彦

志ざす方の手枕の松は別府の海濱住吉大明神の境内にあるなり此海を稱して比々奇の灘といふよしなるが假寐の岡も程近き手枕の松の取合せ折角能く出來て居りながら比々奇に夢の縁は響かず是は宜しくいびきの灘と改むべしと見ぬ先よりの小理屈は

却て臆語の因みあり、去程に兩人は明石の町を跡に見つゝ汽車に揺られて大久保驛を過ぎ二十分間餘りにて早くも土山驛に着きしかばオヤモウ來たのか無造作なものだと荷物を提げて下車せしが其實松巡りの方角は西よりすべきか東よりすべきか少しも譯が分らざれば兵庫停車場の傳を以て驛長を訪ふに如かずと予は竹翁を待せ置きて驛長に對面し事如此々々と述べたるに此人も亦心切者にて挨拶振も懇ろに成丈御便利を與へませうが手前は近頃此土山に參つた者で餘り詳しくないのですから夫々聞合せて上げませうと驛夫達を呼集むれば銘々卓子のまはりを取巻き先づ手枕の松を見て尾上高砂へ行くが順道です夫から石の

寶殿を見て會根の松へ廻り阿彌陀驛へ出る方が好都合かと思ひます偕此間が何里位是より是が何十丁と口口に説明するを驛長一々筆記して此書付をお持なさいと其儘我手へ渡し呉たり、予は當國赤穂の浪士が吉良の邸の繪圖面を探し得たやうな心地にて竹翁の前へ差出せば辱けなしと手を出して之を頂く有様は一力の鮎魚の如し夫は浮大盡も内實は飲込兼し趣きなれど是は容易く飲込み得る道々の案内記首尾よく手に入る上からは名所々々へ討入るべしと足を鴻毛よりも輕んずる事一味徒黨の命に似たれど靴は泰山よりも重くして君臣の義も管ならず車夫は居ぬかど見廻す所へ例の驛長出來り貴君方が車をお拵へになると不

當な賃錢を食られて御迷惑を感じるやうな氣遣ひがありますか
 ら手前が申付けて上げませうと愈々益々心切なり、これは何う
 もと許りにて其言葉に甘へるうち驛長は車夫と談判を開き里程
 殆んど六里餘り片道なるの故を以て少しは車夫の心をも察し一
 臺七十五錢づつにて折合ふべき事に定め増錢酒代を強請る事堅
 く無用と誠むる杯痒い所に手が届きし上蚤をも押へ付しが如き
 氣持の能き計ひに我々は無性に喜び大安心にて車に乗る、やが
 て停車場前を挽き出し麥畑の間を行くうち竹翁は車夫に向ひ此
 邊の麥の出来は案外悪いやうではないかと通がつて話し掛くれ
 ば「エ、何うして大豊作です近年是程に出来た事は覚えぬほ

どで御座いますと回まされてム、と詰り夫でも麥が細いやうだ
 と無理に凶作へ引付んとせしが其甲斐なかりし様子なり、車は
 程なく別府に着き船の帆柱二三本磯馴松の葉越に見ゆる入江の
 橋を打渡りて住吉神社の境内に入れば其右手に手枕の松あり丁固
 の夢も偲ばるゝ十八公の寢姿は如何にも肱を折曲げて枕にした
 る風情にて周りは四十歩亘りは二十歩ありといふ寔に希有の靈
 松にて幹は猛虎の躡躑まるが如く枝葉は臥龍の蟠まれるに似た
 り是即ち住吉大明神の神木にて神も偏へに愛で玉ふのみか人間
 も非常に大事がると見え幹の横はりし所には板屋根を拵へ其下
 には石の柱を支へ枝々には杖を突かせる事幾本とも其數知れず

尙周圍には石垣を遶らすなど唯々大切に扱はるゝは果報めでた
 き松にして其果報は手枕しつゝ寝て待ちしものなるべし、實に
 世の中に寝る程樂はなかりけりと松は眠れる容なれども見る人
 は目覺むる心地す

(卅一)

竹の屋主人

播州の松盡し皆丈低くして四方に擴がるをもて妙とす法かも木
 肌赤く葉細かく色美し此の手枕の松も千年をこゝに肱枕樂しみ
 其うちにありと孔子様を氣取る其聖人の徳にも耻ぢず差出たる
 枝に紙を結び付たるが多きを茶店の主に問へば此邊の女共が手
 枕といふところから男を持つやうにと縁結びに斯様な徒らを致

しますといふ春の夜の夢ばかりなる手枕に甲斐なく立ん名も惜
 まず御手手枕とぞればみて二葉の契りを紙捻に結び假寝の岡
 と願ふなど淺ましきよ柳子が云はるゝ寝て待つ果報松にあれば
 寝て待つ阿呆も多かるべしと打つぶやきて此を出で狭く汚なき
 泥壁の小家がちなるところを彼方此方と曲り漸やくまた廣き耕
 地の道に出で高御座山を高く右手に見て車を走らす、左右皆な
 麥畑にて車夫は折々ふり返りてはソレ此通りよく麥は出來て居
 ります此邊は一畝に地が肥て居りますから麥は能く出來ますが
 其うちにも當年は豊作で最初我が出來悪しと云し農通を退治
 る爲に一一さし示しての土地自慢、其度ごとに先に行く柳子少

ス／＼と笑ては此方を振向くは憎し、早や正午ならんが明石の
 汽車にアハを喰ひし爲か腹は淋しからず左れど晝飯扱ともなら
 ぬば車夫に其の支度するところありやと問へば高砂へお出なさ
 れば能い所がございますとの事に偕は高砂の松のほとりに風雅
 な料理屋のあるならん相生の松の影を盃中にうかべん事もまた
 風流なるべしと例の往過の心づもり、但看れば前程に舞子式の
 松林これや其處かと又心づもり、左れどウツカリ車夫に話かけ
 て逆捻を喰ても氣が利かずとダンマリで居ればダンマリで此青
 松白砂を驅抜けんすとす、今は堪らずオイ大層能い景色だが此處
 は何といふと問ば、ハイ此處は濱の宮と申します、お宮がある

のか、ハイ辨天様でござりますと答へしが此車夫土山者にてよ
 く知らぬなり播州名所圖繪に據れば天満宮にて此を安田村とい
 ふとあり、圓心以來播州は赤松の領地であつた丈け馬鹿に赤松
 だらけだししかも此等にも四五百年は經たと思はれるが多い木振
 も皆面白いが外にも幾らも古木の松が有るだらう加古の松とい
 ふのも有るそうだな、ハイ松は名高いのが幾らも有りますがマ
 ア今の別府の手枕が大きいのでは一番でございます、どの事に
 又心づもり外れ高砂尾上曾根の松皆名に聞えたるどころにて手
 枕の松は此地へ來てはじめて聞しほどなるに大きいのでは彼が
 一番と云れてはアトは我が住む向島の秋葉の松ぐらゐるものか

何だか樂みが減つて來るやうだ左様して見ると舞子の松は數が多
 いだけ眺も深いと松の葉を數へるやうな胸算のうちまた松原
 の中へ車は入りしが此こそ名に高き尾上にて松原の中に小學校
 あり折しも運動時間とて大勢の子がさまざまの遊戯、籠を背負
 ひ熊手を持ちいつも畫中の子であつた濱の童も今は學校にて落
 葉にあらぬ字をかくかといと嬉しく打笑みて見やれば子供等も
 見て打笑ふ無邪氣の有様は列立る此の松の精靈が揃つて遊びに
 出たるがごとし昔は松の精靑牛になりて現れしとか其の角文字
 のいろは子のかた可愛くして危なげなし

(卅二)

柳 鳩 亭 寅 彦

牛の角文字いろは子は皆陸むく遊び戯れ直ぐな文字曲み文字の
 しくくと泣くは見へず小學校も斯様な地に建て松原續きの絶
 景を直ちに運動場に宛る譯ゆゑ嘸ぞ健康の爲めに能かるべしと
 予も心地よく打見遣りながら松の根に車を揺られて此ところを
 出抜れば即ち尾上神社なり建札に「うたひの名所」と筆太に記
 したるを見て阿蘇の宮の神主友成を氣取りたくなりしが我々は
 本行よりも芝居の神主鈴成の方にて少々半道染て居る故勿躰振
 らずに門を入り先づ相生の松を仰ぎ見れば「日本瑞一三代目相
 生靈松」と書きたる札を松の傍らに押立たり、此瑞一の瑞の字
 極めて面白く隨一を異様に書く三代目と心筋かに感服し成程め

でたい土地なれば斯うありさうなものなりと難有涙さしぐみぬ
 例の社傳なるものに依れば神功皇后三韓より凱旋あらせ玉ひし
 時此地に着し玉ふ其折諸神形をあらはして歌舞を奏し猶御契り
 の印として松の實二粒を植たるに一夜の程に大樹となり連理の
 枝を生じたり其後延喜三年の春肥後の神主友成此の松を尋ねし
 に精靈老人夫婦とあらはれて其由来を語り忽然として消失せけ
 れば友成奇異渴仰の思ひをなせり斯る靈松も不時の災ひは免か
 れ難く豊太閤三木城攻の時藝州より城方へ三萬餘騎の援兵來り
 兵糧運送の後詰として尾上高砂一躰に陣を取り彼の松を切て籌
 とす夫より枯朽ちて今の松に至るまで三代を經たりとあり、所

以を聞けば益々難有けれど謠曲を獨鈞に取つて矢鱈に名木がる
 は些と無躰の形ゆる「むたいの名所」といふ建札も欲しい様な
 心地せり、古今の序に高砂住の江の松もあひおひの様に覺えど
 あれど其前後の文を見れば或は松蟲の音に友をしのび又は男山
 の昔しを思出て女郎花の一時をくねるにも歌を言ひてぞ慰さむ
 と書けり左すれば松を相おひとは相生に老ぬる意にて松も昔の
 友ならなくにとか岸の姫松いくよ經ぬらんどか動もすれば歌人
 が松を相手に年寄の諄言を吐くゆる高砂住の江の松も相老る様
 に覺ゆるとは言ふなるべし、此高砂とは尾上より濱の天神、扱
 は今の高砂へ掛け一面の松林を指たるものにて是を住吉の濱に

くらべ孰れも古き松のあるを久しき物の例しに引て相おひと捻りたるならんが夫を謠曲では今一つ捻つて夫婦相生の松に作り姥は高砂の人樹は國を隔てたる津國住吉の者なれど心の通ふ妹脊の道は遠からずと附會てワキの神主殿に向ひ年久しくも住吉より通ひ馴たる尉と姥などと相生の惚氣を聞かせ果は高砂住の江の相生の松の精なりと名乗までも揚げさせたり、夫を後世再び捻つて雌雄偶生の松とし此尾上にも近所の高砂にも相生の松をこしらへ二組の夫婦を置て見れば浦山國を隔てて住む尉と姥の謠曲の本文却て味なものとなれり何かは知らず變なものにて予より見れば曖味の松少しも譯が分らぬ儘に眼を本社の方へう

つせば此處には「都戀しき片枝の松」と云ふがあり其右手には神寶の右鐘あり、今の世は高砂の尾上の鐘も音せぬなり曉かけて霜置かぬ爲め立派な堂を建立し大事に保存するのみにて撞く人もなき代りに撫でて見る旅人は其數多しと思はれて古色のピカ／＼としたるは賓頭盧尊者のお頭に似たり

(卅三)

竹の屋主人

尾上の古鐘古色愛すべし、先年大阪に遊びしころ櫻の盛りに渡邊霞氏亭に長柄の鶴満寺へ引張り出され此の古鐘は漢物で千三四百年のもので所謂黃鐘調なりとて其音を聞かされし事ありしが夜中にカチ／＼カ、チと廻る音を拍子木調とまでは覺えな音

律家なれば成程と云ただけで耳にもとまらざりしも其形は目に残りて丈四尺ほど口の徑二尺ばかり大ききといひ天人および雲の模様等同じごとし此尾上に近き刀田山鶴林寺にも同様の古鐘あり又三井寺にも同様古鐘あり日本の四の名鐘と音に響いたものを撫て見る群盲評古「何でございませるか謠曲にも昔は本釣鐘を打ち込んだものでございませるか」と聞かぬ所が我ながら奥床しいくらゐで借境内を出て見ると車夫兩人揉手をしてエライ濟ません事とござりますが、此で車を替へて頂きたうござります丁度高砂から曾根の方へ歸りますが二輛此方のお客様は御承知でござりますがとウヂつきたり、是は土山の驛長が途中替事など

はならぬぞと屹度云付しゆゑ強て云かねて願ふなり、見れば新婚旅行とも見ゆる若夫婦、婦人の方は早や我が車に乗てあれば雙方都合がよくば替へて乗りもせうが貴君方も宜しいかと念を押せば男の方丁寧に貴君の方さへ御承知ならとの挨拶、此に於て賃金を拂ひ土山の車夫と替へて高砂の車に乗る、此松巡りのうち新婚旅行と見るに二組三組逢へり相生の名によりて松の千歳を契らんとてなるべし、尾上を出て四五丁大きな川の志かも水清きがあり車夫に問へば加古川の下にて此に至りて海に入るといふ是より市家續きの中深川の河岸付邊に似たるところを幾廻りするに船板にて塀を巖疊に作りたる仕舞丸屋構へ多し是は

皆船持にて身代もよきが先年の高潮にて土地は衰へましたとの話し左れど二三の製造場は新たに建ち戸數二千もありといふ。我は只例の心づもり尾上も高砂も一所で松ばかりの丘かと思ひしには違ひたる小都會入船の船頭など夜は町に入りて飲食遊興し晝は斯くヒツソリなれど夜はなかくに賑はしといふ、おもへば此高砂の船頭徳兵衛呂宋ヂヤガタラ天竺へも船を通はして交易し宗心物語の一書には随分大法螺を吹き立て釋迦堂町の大ききなど芝居でまで驚かし此地に代々赤穂屋徳兵衛と子孫もありしと聞きたり蒸氣船のない昔は斯る港が船相應の掛り地にて船頭に冒險の豪者もありしならん太閤が朝鮮攻にも此處より

水主を百人選抜して引つれしといへば其頃は此邊一昧に今より繁榮なりしなるべし、水をはなれし合羽の主と龍宮で肝を取られ損なつた猿の後が替事の車に揺られて囁話しの親玉の天竺徳兵衛の故郷へ來た譯ゆゑまた釋迦堂町へでも引込まれ天氣の晴れた時にそろく膝から腰のあたりを仰いで見るやうな大な佛の掌上へでも乗せられるのではなからうかと少し考へ込むとき車はガチリと止つてへい此處が高砂でございますと云ふを見れば寺の裏門の如くに入れば子院のやうな構へなりついで左即はち縣社高砂神社なり

(卅四)

柳塢亭寅彦

此高砂へ来る道々眼につきしもの深川の河岸然たる船板作りの家々の外尙一つ二つあり、途上諸所の石の傍示に右尾上、すく高砂など、彫付たるを最初は不思議に感ぜしが、すくは直にて濁りを添へて讀んで見れば忽ち解し得らるゝなり、流石は古へより歌に詠るゝ名所とて濁りを打たぬところが結構だが道しるべに左右東西の外真直といふを知らせるは關東べいの見馴れぬ事ゆゑ先づ眼に付くも道理なるべし、又高砂手前の村落には軒別に紙札を貼つて諸事儉約と記したり是は高潮の祟りにて非常の凶作なりしかば人々言合せて儉約を守り當前なら此事を掌に書記し忘れぬ様にする等なれど夫では消える虞があるゆゑ銘々紙

に認めて門口に貼りたるならんか、遊山旅の我々は眞綿で首の心地になり此方も用心せねばならぬと思はず撫づる蝦蟇口に妖術の縁を引ひて天竺徳兵衛の故郷に着き高砂神社へ這入つて見れば竹翁の言はるゝ通り子院のやうな構へにて尾上よりも風情なし、祭る所は素盞烏命、稻田姫、大日貴命の三座なれば縣社と崇め奉りしならんが其傍らに相生殿とて尉と姥の社あり末社には鶴の社鶴の社もありさうなものだと言へば竹翁は彼方を指さし幾許も小さい宮があるからあの内には箒木熊手の社もあるサとそこそここに一廻りして相生の松の下に出でたり當社も松の効能書は尾上に齊しく天正の頃軍兵に切られて箒となり今の

は跡繼の松なれど其昔し尉姥二柱の神此連理の木の下に出現し
 我は伊弉諾伊弉册の神なり今より神靈を此處に留めて永く夫婦
 妹脊の道を守らんと告げ給ひて忽ち神隠れましましきと高砂
 住の江の松の精を大層なものに擔上げ同じく自稱してうたひの
 名所とは難有し、高砂や二人の尻に帆をかけて今や早くこゝを
 立去り石の寶殿へ向はうと後に聞きなす相生の松風さつさつと
 足を疾め再び門外へ立出で、待せし車に飛乗れば然るべき晝食
 の場所へ御案内申しませうと車夫は互ひに目指す家を彼れか此
 れかと相談の上石寅といふに引込みぬ、竹翁例の心つもりに松
 林中の料理屋へあがり相生の松影を酒杯の中にかべて大に風

流がらんと思ひし本讀はガラリと外れこゝは市家續の内にて家
 も汚穢く薄暗ければ奥座敷の居心甚だ妙ならず松影をうかべる
 代に天井の蠅除玉が金銀二色に見えきて杯中に映りなば彼星操
 の見得になり大願不成就疑ひなしと行く先々の不出來の程を
 覺るより外はなし尾上高砂の松の傳では他の名所も危険いもの
 ゆゑ必ず星が下るであらうと天井を仰ぎ見たるに蠅除玉はなけ
 れども煤に黒みて氣味悪し、是では到底落着いて一杯とは行か
 ぬゆゑ飯だけで引退らうと酒を廢する事に定めて膳部だけを調
 へさせ左らば飯茶碗に茶敷の木ノ葉をうかべ松葉に替へて賞
 翫せんと互ひに箸を把りたるに副食物の蟹ちよつと異なり、女

中に問へば名物で御座りますと云ふそんなら今一つの名物なる
 天竺徳兵衛の宅の跡は今でも名残が存つて居るか徳兵衛が座頭
 に化けた頃おれの先祖が棒突をして居たのだと眞面目になつて
 尋ねしが左様なものはなしと言へり數代相續せし赤穂屋ならば
 形だけでもありさうなものなれど例の魔法をつかふ事ゆゑ人が見
 たら蛙になり其名残をも留めぬ様に子孫何れへか飛去りしなる
 べし

(卅五)

竹の屋主人

名に高砂も低砂の松にオヤ／＼と驚き柳子がいはゆる松風の音
 只サツ／＼と立出しが此地を高砂といふにもへば臺灣を昔は

高砂の島と呼びし事ありて今のタカウが其名の残りなりと聞く
 若しくは此地の船頭に徳兵衛のごとき豪者あり同島へ渡りし事
 ありて我が所の名を島に名づけしにはあらずや付てはまた芝居
 でする天竺徳兵衛が蝦蟇の妖術のこと蝦蟇は地仙になるとか不
 思議な氣を吐くとか随分稀有な傳へ多く古繪巻にも蛙の怪あれ
 ばそれらを取りて近松門左衛門が天草騒動をあてゝ享保四年に
 「島原蛙合戦」を書いて四郎が蝦蟇の術を行ふがはじめにて寶曆十
 三年には近松半二等が「天竺徳兵衛郷鏡」と題し吉岡宗観が「子
 大日九天竺へ渡り日本へかへりて父が邪法を受継ぎ蝦蟇の妖術
 をつかふといふ事に作りしが此の眞の徳兵衛の家に取りては迷

惑な話し今なら名譽恢復の事もあるべし作者は只天竺徳兵衛といふ名の怖しげなるより思ひよりしならんか是はチト傍道へ外れるが近松半二の此作の趣向の山は天竺話しの場ではなく徳兵衛が難船して九年の間便なきより死したるものと定めて女房が入夫して二代の高砂の徳兵衛が出来た後に徳兵衛が歸り來り昔の夫今の夫ともに本名ある立合となるどころ、此難船の船頭の後へ入夫して先夫が命助かりて歸る騒動は古くある話しを取りしにて後に兩人の夫の間に女房が命を棄つるは南北がまた四谷怪談の直助と與茂七の出合に取れり、半二曰く随分骨を折りて作はすれど太夫に語り崩されると手摺に殺さるゝは情なしとこ

れも半二が骨折りてよく書きし場は芝居に出ずして却つて後で南北の手柄にされて仕舞ひ付場の天竺話しのところばかり見らるゝは是も情なしといふなるべし諸二人の車はコンナ道寄りはずすく高砂の町を抜抜け麥畑の中を通り加古川の流を渡りまた小村へ出しどころ車もかわらぬほどの狭い道へ肥料糶穀麻苧などつけし馬二疋引ぱり連れて二人の百姓いくら後より聲をかけても聞かぬ顔にて馬を横に引向けず「已等が街道を邪魔な奴がまかも遊山らしく通りをる思ふさま困らしてやらう」といふ風にて尙ノソリ〜車夫は二足三足曳いては止り「オイ一寸くら片寄ッて呉んか」と緩くり相談するばかり肝の焦れると大方

ならず漸やく示談整ひて澁々馬を片わきに寄せるに挽き越したりやがてアレが石の寶殿の山續きと指示す小山續きを見て十町餘ノロく上りとなるにまだ車夫の掛取らねば此處等から下りてやらうと草履でヒラリと下り立ちて車に縮みし足を伸せば車夫はまた右手の山を指さしアレが「觀瀾處」の字でござるといふに氣が付ば文峯といふ人が滅法界大きな字を石の寶殿の傍の加茂山へ鑿り付けたといふことを聞いたがナルホド此から見える何しろ肝腎の寶殿を先にして後で見やうと勢ひよく進むに車夫は田舎屋の前へ車を置き一人は車の番一人は案内に上る岩ども土どもつかぬほどの岩山の上に小松など生え猿が澤山遊び戯ふ

るゝ様子に珍らしき事と立止りて望遠鏡にて見れば寶殿の後の山の上に大勢上りて遊ぶなりけり、何時も斯く參詣の人あるかと驚けばナニ今日は十六日で絲場でも何處でも一日と十六日は休みなので皆斯う遊びに出ますといふ、猿と見し山上の人また下の我方を指さしてキ、と笑ふ、上よりは又我等を猿と見るなるべし

(卅六)

柳 鳩 亭 寅 彦

山上の猿も追々近づくに連れて顔や手足も歴々と見え兩眼鏡を要せずとも正に人間なる事を確か得るやうになれり但し我々が五六十歩進み行く其間に猿ども三本の毛を才覺し首尾よく人に

變ぜしものにて全くは猿なりしやも知れぬと其處までの詮索無用なるべし、夫につけても岩山の高からぬを推すべく音に響きし石の寶殿即ち靜巖窟の奇觀といへるも規模の小さき事を覺り内心オヤ／＼と思ひながら麓の池の汀を通り兩三軒の茶店の前より磴道を登り行き眼下に加茂山の背後を瞰れば數百の人夫群がりて此處等一體の産物なる龍山石を切出し居れり、是は大昔しよりの仕來りにて年々歳々間斷なく大勉強にて石を切り四方へ積出す由なるに巖爾たる小山一つ能くも切崩して仕舞はぬものだと感心しながら左へ折れて檜皮葺古めかしく落書だらけの門を入れば正面に石の寶殿あり、生石村主眞人の歌に「大汝

少彦名のあましけん志都の石室は幾世經ぬらん」とあるを以つて當所生石子村の石殿を二神國造營まし／＼ける時暫し此どころに在しなから神議りに議り給ひて一夜に石室を造らんとせしが事果ずして夜明けにければ其儘打捨給ひたる舊跡なりと傳ふるなり、左れば生石子神社と祀りながら拜殿あるのみにて本社なく神躰とする石殿は岩山の山腹を切抜き社壇の形ちに造りたるものにて幅二丈三尺高さ二丈六尺屋根は西に向ひ扉のあるべき所は天に面し勿躰なき譬喩かは知らねど箱庭のお宮を仰向に轉したといふ姿あり上には土を留めて稚松雜草モチヤ／＼と生ひたれども是は靈木靈草と難有がるべきもの、由にて周圍に水

の溜りたるも唯堀りて窪ければなりと一口に言ふべきものには
 非ず此水にも奇しく妙なる事ありといふ、就ては此神跡を拜す
 る人は寶殿の底即ち横倒しの石室の床下に當る所を拍手打つて
 拜む譯ゆゑ異なる事言ふに及ばず彼の田圃から拜む觀音様後
 向とは曲がないと白酒賣りの臺詞よりも今一層曲がなし、斯く
 云へば更に靈場らしからず石殿の製作も別に變りのなきを見れ
 ば二柱の神よりも石工の手際らしく随分氣永にコツコツと遣て
 除け石を産出する所ゆゑ石の神でも祀つたものでは妙でない
 言たくなれど縁起といふもの、傳説は左る詰らなき事には非ず
 前の歌を證として此處を靜巖窟と定め欽明天皇の十三年不思議

なる神勅ありて此御社を草創の當時は攝社末社とも壯麗を極め
 孝徳天皇の白雉五年には帝の御夢に奇異なる御告げありしかば
 千石千貫の社領を御寄附あらせ給へり然るに中ごろ赤松、別所
 等の動亂の時左しも宮柱太しく立てる御社も頽破して舊觀を失
 ひたれども神徳は彌榮えに榮え醫師の道と禁厭の術とを掌どり
 給ひて靈驗いやちとなりと言へり、あはれ馬鹿に附ける御藥も
 あらんには何物を見ても茶にしてかゝる我が心を癒したまへど
 竊かに祈念を凝らせしが想ふに神は寶殿の内にてヤレ、阿呆
 臭い事だ此臭味を除けるには茶椀の中に水を入れて盆に伏せる
 に如くはなしと禁厭をや任給ふらん一向張合のなき事なれど石

を相手に理屈も言はれず車夫の案内に任せて寶殿のまはりを巡れば參詣人の落書隙間もなく溜水には伸氣らしく水馬遊び居れり

(卅七)

竹の屋主人

石の寶殿の山は其あたりの小山と同じく全山龍山石にていと柔かなれば切出して諸方へ出すべきも此の寶殿あるため今に手の付かぬは有難き事なりこれを静が窟といふことは如何あるべき播州名所圖繪を著はせし秦石田といふ人すら此に註して「此地は近國の名物龍山石を産する山にして寶殿も一箇五十餘丈の石山の中を切抜き即ち切抜たる所にて造り其處に倒し捨てたるさ

まなり土臺と屋根との間は四方とも切かけて狭く上になりたる所には自から土留りて松を生ず四周に水の溜りたるは掘りて窪ければなり」として次にまた「或は云ふ石室の製作において異なる事なし今にも工備だにかさねたらんにはしか作るも安かるべし只横に倒したるのみは奇なり其義考ふるによしなし」と云て柳子と同じく少しも神業がらず有難がらず、伴の蒿蹊は萬葉集の静の岩屋の歌について曰く「静の窟いづかたとも若られず抄物にもいはれず或は播磨の石の寶殿をそれなりといふは非なること論なし然るに近年小篠道冲といふ人石見國濱田侯の臣にて京師逗留の日話せられし趣きを傳へ聞くに其國邑知郡に

静窟といふものあり故に其郷を岩屋村と號す鏡岩といふもの
 下に小社あり、静権現と稱す侯命によりて社を開くに内に物
 なく棟簡に少彦名神とかけるのみ云々」として其地の圖をそへ
 て閑田耕筆に出したり、又加藤千蔭の萬葉略解にも此歌の註に
 本居宣長の説を引く其説に曰く「石見國邑知郡の山中に岩屋村
 といふありて其山を志づの岩屋といひて甚だ大なる窟あり高さ
 三十五六間ばかり内甚だ廣し里人の云傳へに大汝少彦名の神
 の隠れ給へる岩屋なりといふ祭神をば志づ権現と申すなりこは
 正しく其里人の語る所なり此所此歌を以て附會するやうなる所
 にはあらずいと深き山奥にてよそ人の志らぬ所なり然れば志都

の石室は是にて若くは生石村主石見の國のつかさなどにて彼國
 にてよめるにや」とありて石の寶殿は云ず、例の橘南溪は此の
 寶殿と奥州の鹽釜は神代不思議の物なりと拜み立たるが我等が
 目には成程鹽釜とは東西よき對のものならんと思ふのみ、左れ
 ど此の村を生石村といひ歌の主生石村主なるところを以て見れ
 ば此をも大汝と少彦名の神が坐せし所といふ傳へもありしにや
 只此歌に附會んが爲にわざと此の大仕事をせしとも思はれず
 殊に此の寶殿近所には八十石階あり高御座山あり神々しき名の
 殘るあれば此もまた一箇の神跡なるべし兎角我等の猿智恵に何
 でもクナシてかゝるといふはソユガ三本足らぬどころなるべ